

研究紀要 6

格条体圧痕文を有する土器について

— 中込遺跡出土の資料を中心に —

浅利 司 (1)

関東地方におけるカマド初現をめぐって

森原明廣 (13)

立石遺跡発掘調査報告

— 1989年国道358号線拉幅等に伴う調査 —

保坂康夫 (31)

立石遺跡での先土器遺物を包含する地層

河西 学 (47)

1990

山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター

序

このたび、当博物館・埋蔵文化財センター職員の日ごろの研究成果の一端を掲載した『研究紀要』第6号を公刊するはこびとなりました。また、今回は、寄稿一篇も収載いたしました。

まず、浅利司「縦条体圧痕文を有する土器について—中込遺跡出土の資料を中心にして」は、1989年に当埋蔵文化財センターが調査した長坂町の中込遺跡出土の土器を中心とすえ、縄文時代早期末とされる縦条体圧痕文土器の編年的位置づけについて述べたものであります。いまだに混沌としており空白の部分も多いといわれる縄文時代早期末から前期初頭にかけての土器編年の一助となることが期待されます。森原明廣「関東地方におけるカマド初現をめぐって」は、関東地方の古墳時代後期初頭を中心とした時期における炉からカマドへの変化についての論考であります。カマドは炉の発展の結果自生的に発生したものではなく、あくまで外から導入された施設であるとともに、カマドに先行するカマド状遺構に着目し、カマド導入にあたっていくつかの段階が設定できると推考しております。保坂康夫「立石遺跡発掘調査報告—1989年国道358号線拡幅等に伴う調査—」は、1989年に当埋蔵文化財センターが調査した中道町立石遺跡についての報告であります。当遺跡からは甲府盆地最古の位置づけがなされた、台形様石器などの先土器時代の石器群が出土いたしました。この貴重な石器群を資料化し今後の研究に資するのが本稿の目的であります。石器群の特徴から、武藏野台地のK層相当のものとの位置づけがなされております。

以上3篇、各位の忌憚のないご批判・ご叱正をいただければ幸甚です。

今回の寄稿論文は、帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏よりいただきました。論題は、「立石遺跡での先土器遺物を包含する地層」であります。氏は、地質学者として活躍され、特に始良Tn火山灰のご研究については定評があります。本稿では、立石遺跡の石器群の年代的位置づけを論議するため、まず遺跡の立地する曾根丘陵の地質研究史を整理し、石器群の出土した黒色帶上部にAT層準があるとされました。氏は、日ごろより当埋蔵文化財センターの調査にご協力いただいており、衷心より御礼申し上げる次第であります。

1990年3月

山梨県立考古博物館館長
山梨県埋蔵文化財センター所長

磯貝正義

絡条体圧痕文を有する土器について

—中込遺跡出土の資料を中心に—

浅利 司

- | | |
|-------------|---------------------|
| 1. はじめに | 4. 中込遺跡出土土器の編年的位置づけ |
| 2. 中込遺跡出土土器 | 5. 関東地方土器群との関係 |
| 3. 編年の研究の現状 | 6. まとめと問題点 |

1. はじめに

昨年の初夏、山梨県北巨摩郡長坂町中込遺跡で、道路建設とともに発掘調査を行なった。その際、注目すべき絡条体圧痕文を有する土器が出土した。

昔うまでもなく、絡条体圧痕文とは、棒や縄などの軸に細い紐状のものを巻き付けて原体とし、これを土器の器面に押しつけて得た文様のことである。絡条体圧痕文に関しては1941年に山内清男氏が、子母口式土器の文様要素のひとつであるとしてから注目されはじめ、その後しばらく、絡条体圧痕文イコール子母口式土器という認識が一般化した。しかし近年になって、子母口式以外にも絡条体圧痕文が存在することが指摘されており、この位置づけをめぐっていくつかの論考が出されている⁽¹⁾。

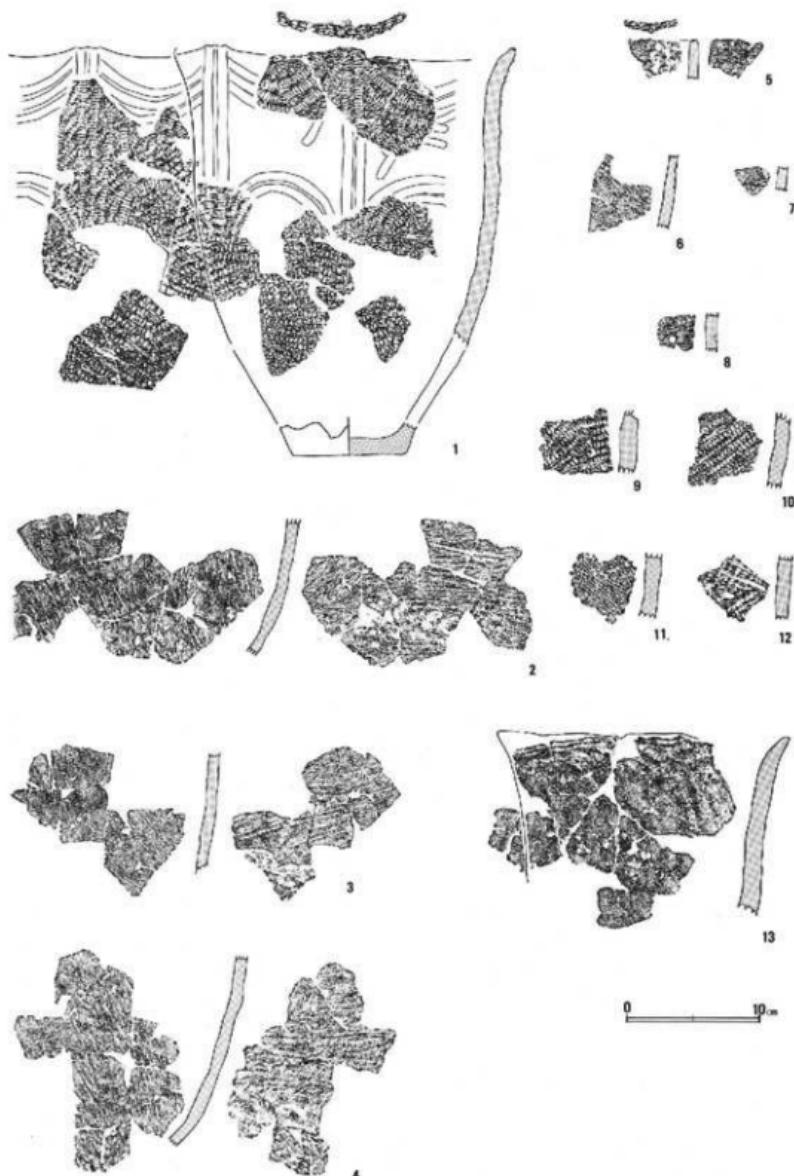
本稿は、中込遺跡の報告書をまとめるにあたり、出土した資料を中心に、絡条体圧痕文土器の編年をめぐる問題について若干の私見を述べてみるものである。何分にも未熟な考え方であり、先学諸氏の批判を乞う次第である。

2. 中込遺跡出土土器

中込遺跡の詳細な説明は報告書⁽²⁾に譲るとして、ここでは出土状況と土器そのものの簡単な説明をする。

中込遺跡は、長野県との県境に近い、山梨県北巨摩郡長坂町大井ヶ森にある。付近は八ヶ岳南麓の日当たりのよい緩斜面になっており、湧水が多く水が豊富な場所である。遺跡は、ここを流れる古川の小規模な河岸段丘上に立地する。発掘の結果、遺構はまったく検出されなかった。したがって、これから扱う土器はすべて包含層からの出土である⁽³⁾。

絡条体圧痕文を有する土器（図1-1）は、器形及び文様構成の分かるものが1点出土した。8単位の小波状口縁を有し、口縁部がやや外反する。胴部上半はほぼ直線的にのび、胴部下半は緩やかに屈曲し底部にいたる。底部は胎土・焼成・色調などから同一個体として扱ったが、胴部と接合しないため確実に平底になるとは断定できない。口径は25.5cm、底径は8.5cmであ



第1図 中辻遺跡出土土器

る。文様はLRの単節縄文を地文とし、その上に長さ35~36mmの絡条体を連続的に押しつけて、直線と弧を組み合わせた文様を構成している。まず口縁の波頂部直下にたて方向に直線を描き、器面を8等分したのち、その間を弧で埋めている。口唇部にも絡条体圧痕文が施される。特に波頂部は、絡条体を押しつけることにより3つの波頭があるような効果をあげている。絡条体は、比較的柔らかいもの（縄か）を軸に、直径1.5mmほどの無節の縄を、9本／20mmの密度で巻き付けている。軸が柔らかいため、圧痕がイモ虫状になっているところもある。口縁部にはこの絡条体をこすり付けた、絡条体条痕文がわずかではあるが認められる。裏面は、口縁部付近を丁寧になでている以外はやや荒く、纖維痕が認められる。条痕文は認められない。色調は黄褐色で、胎土には、纖維と長石と不透明な小礫を含む。焼成は良好である。

この土器とほぼ同時期と思われる地点・層位から出土した土器群についても若干触れておこう。図1-2・3・4は、表裏に条痕及び擦痕を有する。表面の条痕は、器面に対してやや右斜め下方向に浅く施される。施文具は、条痕（擦痕）が細かくて不規則であることから、柔らかい纖維状のものであると考えられる。裏面の条痕は、器面に対して横方向に施文されている。施文具ははっきりしないが、条痕の幅が広く、断面が四字状になっていることから、硬質のものを使ったと考えられる。色調は赤褐色、胎土には纖維・長石・赤色の小礫を含んでいる。5は口唇部に貝殻の腹縁部を押しつけている。6・7にも貝殻の腹縁部を連続的に押しつけた文様がみられる。裏面の条痕はあまり明瞭ではない。8は直径4mmほどの刺突痕が認められる。刺突しながらねじったような痕跡である。裏面には横方向の条痕が残る。13は、口縁部がわずかに外反し口唇部が尖った器形である。器壁は厚いが纖維を多量に含むため脆弱である。金雲母を大量に含んでおり、他の土器とは絞りできる。色調は灰褐色である。これらの他に、9・10・11といった、胎土に纖維を含み表面に縄文を施すもの、さらにその縄文のうえに沈線を施す12等があるが、やや離れたところからの出土である。

以上、中込遺跡出土の土器について簡単に説明をした、この中で絡条体圧痕文を有する土器に関して注目すべき点は次の7点である。

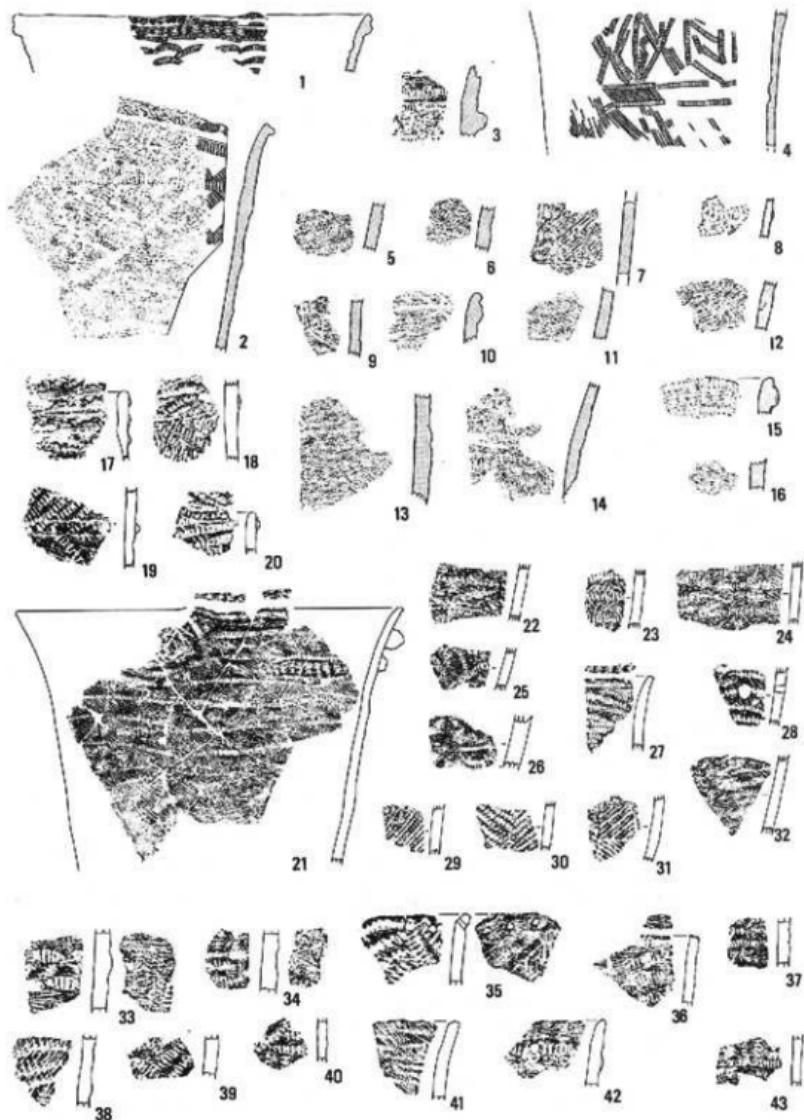
- ①. 地文に縄文を施している。
- ②. 柔らかい軸の絡条体（縄軸絡条体）を使用している。
- ③. 文様構成が直線と曲線を組み合わせた特徴的なものである。
- ④. 裏面には条痕をもたない。
- ⑤. 平底である可能性がある。
- ⑥. 口唇部にも絡条体圧痕文が施される。
- ⑦. 条痕文土器・貝殻腹縁文土器を伴出する。

3. 編年的研究の現状

絡条体圧痕文土器の編年的位置づけについては、関東地方と諏訪湖を中心とする長野県地方とで別々に進行してきた感がある。



第2図 絡条体压痕文土器(1) 1.九山遺跡, 2~5.男女倉遺跡C地点,
6~8.高風呂遺跡39号銚住, 9~13.同43号住, 14~25.同40号住, 26~32.中島A遺跡



第3図 絡条体圧痕土器(2) 1～4. 繡棚B遺跡, 5～16. 贈棚B遺跡
遺構外, 17～20. 寺野遺跡, 21～32. 梨久保遺跡23号住, 33～43. 堂の前遺跡

長野県内での研究はここ数年で急速に進展した。それは、東海地方の土器を伴出する遺跡が調査されたことが大きく影響している。具体的には、原村阿久遺跡（小沢・他1982）、茅野市高風呂遺跡（守矢・他1986）、膳棚B遺跡（百瀬・他1986）、中島A遺跡（同左）、岡谷市梨久遺跡（小沢・他1986）、塩尻市堂の前遺跡（小林・他1985）等である。これらの報文中で報告者らは東海地方の土器を基軸にして意欲的に編年作業を進めている。宮下健司氏はこの成果をふまえて、絡条体圧痕文系土器を4段階に分類し編年している（宮下1988・1989）。氏によると、第1の段階は、表裏に条痕文が施され、それを地文にして、「イモ虫」状の太い絡条体を口縁下に施文するもので、絡条体で文様をつけるという装飾的要素の少ない土器である。例として牟礼村丸山遺跡をあげている。第2の段階は、裏面には条痕文を施さないで、山形や「X」字状のモチーフをもつものである。例として梨久保遺跡、膳棚B遺跡、高風呂遺跡40号住居をあげている。第3の段階は撫糸文を地文とする土器群をあてる。例として梨久保遺跡、青木沢遺跡をあげている。第4の段階が最終段階で、前期初頭の撫糸文・網文土器に伴う土器としている。例として梨久保遺跡や松川村有明山社遺跡をあげている。伴出する東海系土器は、第2段階で入海Ⅱ式～石山式、第3段階で石山式～天神山式の土器である。

この編年案は大枠で首肯できると思われるが、もう少し細かく検討してみたい。まず、編年の大きな柱になっている地文の変化のなかで、条痕文が施される第2の段階までが、さらに細かく分けられそうである。条痕文は表・裏の違いの他に、貝殻によるものと絡条体によるものの2種がある。小沢由香利氏が指摘しているように、絡条体条痕文は貝殻条痕文よりも後出的で、貝殻条痕文の疑似文様として出現した可能性がある（小沢・他1986）。高風呂遺跡の住居址では両者が入り混じって出土しており、住居址ごとにその比率が異なるのが確認されている。しかも貝殻条痕文が主体となる住居は古く位置づけられる。さらに「華麗的なもの」は、絡条体条痕文の土器により多く伴う傾向が認められるという。このことから、はっきり段階的に分けられるかどうかは分からぬが、貝殻による表裏の条痕文を用いる第1の段階のあとに、絡条体条痕文を表裏にもつ絡条体圧痕文土器が存在し、第2の段階（裏面の条痕の消失）がこれにつづくと言えるのではないだろうか。

文様構成については、宮下氏は第3段階以降はふれていないが、氏が編年の基調としたと思われる膳棚B遺跡等の報文中で、百瀬忠幸氏は、撫糸文を地文とし「繊細な絡条体圧痕文を横位と縦位のみの構成を似て施文したもの」が3期以降につづくのではないかとしている。例として塩尻市の青木沢遺跡をあげている。たしかに梨久保遺跡23号柱や75号柱の資料をみてても、撫糸地文に上記のようなモチーフが認められる。しかしながら、同時に曲線的な施文や斜位の施文等も少なからず認められるのである。必ずしも、横位と縦位のみに限られることはないといえよう。したがって、当段階以降のモチーフを横位を縦位のみのものに限らず、曲線的なモチーフ・斜位のモチーフを含めて考えたほうが良いように思われる。4で述べるが、中込遺跡出土のものも、やはり曲線的なモチーフを有しており、第3の段階以降に位置付けられる可能性が高いのである。さらなる細分と位置づけは、資料の増加を待ってからにしたい。

4. 中込遺跡出土土器の編年的位置づけ

上記の考え方を参照にしつつ、中込遺跡出土の絡条体圧痕文土器の編年的位置を考えてみたい。まず最初に問題にすべきは、縄文を地文に用いている点であろう。しかしこの類例は著しく少なく、末だに分析に耐え得るましまった資料は発表されていない。上記の遺跡中では、高風呂遺跡でC種として紹介されているのみである。高風呂遺跡のC種は、裏面にハケまたは絡条体条痕文が施文され、表面には密に軸巻きされた絡条体圧痕文が菱形・山形に施文されているものである。繊維の量は比較的多い。出土数量が限られているためか、その編年的位置については報文中では触れられていない。条痕文が裏面に施されることからすると、古手の傾向を示すといえる。しかし、文様構成自体は宮下氏の言う第2の段階に相当する。このことから当土器の編年位置づけは、第2段階以前のものの可能性が高い。梨久保遺跡では、絡条体が直接施文されていないものの、撚糸文を地文にする絡条体圧痕文土器に伴って、縄文が羽状に施された土器が出土している。口縁付近に隆起が貼付されており、報告者である小沢氏は、この土器群を前期初頭（花積下層式初期）に位置づけられるのではないかとしている。同様な例としては、長門町中道跡（児玉ほか1984）から出土している羽状縄文を主体とする土器群がある。報告者により「中道式」の型式名が提唱され、やはり前期初頭に位置づけられている。

中込遺跡出土のものは、2で述べたように表裏ともに条痕文が施文されていないので、新しい傾向（第3段階以降）を示している。文様構成も曲線的な圧痕を規則的に施していることから、同様な傾向を示していると思われる。さらに地文の縄文が羽状に施文されているのはより前期的な手法であると考えると、宮下氏の第3の段階以降に位置づけられる可能性が高い（梨久保遺跡の縄文施文の例などを重視して考えると、あるいは第4の段階にまで下るかもしれない）。

これをさらに傍証するのは、伴出した土器群である。数片の出土なので断定は難しいが、貝殻腹縫を山形に押しつけた土器（第1図6・7）は、関東地方の打越式の土器に類似する。これと同一個体と思われる第1図-2～4の胎土、調整、色調も打越式土器に非常によく似ている。

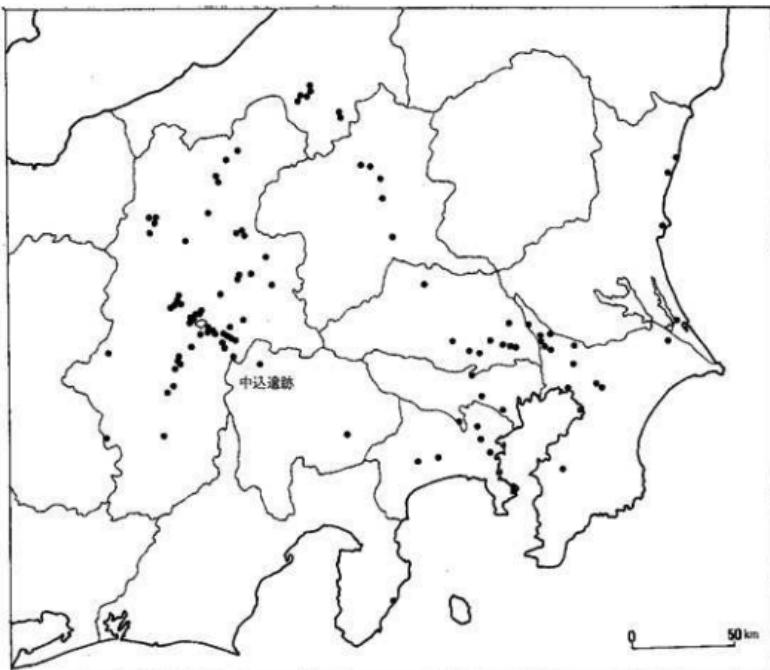
調整・文様の変化	東海地方	関東地方	遺跡名
表裏の貝殻条痕・「イモ虫」状の太い圧痕	?		丸山遺跡
表裏の絡条体条痕・山形「X」字状のモチーフ	入海Ⅱ式		高風呂遺跡
絡条体条痕文地文・山形「X」字状のモチーフ(?)	石川式		高風呂遺跡
撚糸文地文・縄文地文・横位・曲線的モチーフ	天神山式	打越式	勝裡B遺跡
撚糸文・結節羽状縄文にともなうもの・横位・縦位・曲線的モチーフ(?)	塩屋上層式	神之木台式	寺野遺跡
		下吉井式	中込遺跡
			梨久保遺跡
			梨久保遺跡

仮に打越系の土器であるということが許されるならば、打越式土器が東海地方の石山式～天神山式に併行するとされていることから、中込遺跡の絡条体圧痕文土器は第3の段階に比定される可能性が高いと言える。

以上の事実を総合すると、中込遺跡出土の絡条体圧痕文土器の編年的位置づけは、縄文時代草期終末（東海地方の天神山式前後に併行）、宮下氏の言うところの第3の段階～第4の段階のはじめとすることができよう。そして、これまでの絡条体圧痕文系土器の編年的位置づけに、縄文を地文とする絡条体圧痕文の存在を加えなければならないであろう。

5. 関東地方の土器群との関係

近年の関東地方における草期末の土器編年は、茅山上層式と花積下層式の間をうめてゆくという形で進行してきた。すでに確立されている東海地方の土器編年を利用しつつ、その概要是かなり明らかになってきている。この中で、絡条体圧文を有する土器群は、東海地方の上の山式～入海I式に併行する時期に、複数の型式にわたって存在するという位置づけがなされている。



第4図 繞条体圧痕文土器出土遺跡分布図（宮下1989に加筆修正）

る。その初現は貝殻腹縫文の模倣であり、終末は貝殻腹縫文への転換にあるという（神奈川考古同人会編 1983・神奈川考古同人会 1984）。

この編年観にはいまだ検討すべき点もあるようであるが、これを以て、前述の編年と比較検討すると以下のようなことが言えよう。絡条体圧痕文の存続的期間には差がある可能性が大きい。初現については両者ともに上の山式に併行するとされているが、終末については中部高地では前期初頭にまでも残るのに対し、関東地方では草期末、神之木台式期には存在しない。このことは、原田昌幸氏が示唆しているように（原田 1984）、両地域に系統差を考えさせる。図4に絡条体圧痕文土器を出土した遺跡の分布図を示したが、これをみても山梨県を空白域として、中部高地と関東地方に分かれる。今後の資料の増加により、山梨県地方の空白部が埋められていく可能性もあるが、現在までに破片さえも確認されていない甲府盆地の状況も考えると⁽⁴⁾、長野県下のように集中的に出土する可能性は少ないと言えよう。分布の点からも両地域の独立性が想定できる。初現から発展過程のある時点まで同様な変遷をたどり、草期末のある時点（東海地方の天神山式期にあたり）からそれぞれ独自の道をとったのであろうか。出現過程から終息過程の系統的な分析を両地域ごとに詳細に行ない、これを付き合わせることにより両者の関連を明らかにしてゆく必要がある。

6.まとめと問題点

中込遺跡出土の絡条体圧痕文土器の編年的位置づけを中心にして、若干の私見を述べてきた。これをまとめると以下のようになる。

- ①諏訪湖を中心とする長野県地方の絡条体圧痕文系土器の編年は、器面の調整・地文の変化を基軸として草期末から前期初頭まで数段階に編年できる。
- ②中込遺跡のものはこの内の後半の段階、早時の終末に位置づけられ、関東地方の打越式期に併行する。
- ③絡条体圧痕文系土器は長野県地方と関東地方とでは、異なる在り方を示す。特に早期終末のある時点からは著しく異なる。

解明された事実はあまりに少なく、残された問題ばかりが目立ってくる。まず、長野県地方における絡条体圧痕文の成立がいかなるものであったのか。どのような系譜のもとにいつ成立するのか。男女倉遺跡C₁地点出土の一群に対して芽山下層式との類似性を指摘する意見もある（椎沢ほか1975）が、確実な併存関係はない。新潟県地方の資料を扱った小熊氏⁽⁵⁾は、その母体を鶴ヶ島台式周辺の幾何学模様に求めている。これが長野県地方にも同様に言えることなのであろうか。関東地方の貝殻施文からの変化とあわせて、今後の課題である。また、その終息についても検討が必要である。これはあくまで予見としてであるが、中道遺跡で指摘されている「原体繩輪巻き回転燃糸文」との関連に注意する必要があるのでないだろうか。いずれにせよ、関東地方とは違った終息を考えねばならない。このほか、早期最終末におかれている関

東地方の土器との関連にも注目する必要がある。甲府盆地東部の沢迦堂遺跡群からは神之木台式の良好的な資料が出土しているが（小野ほか1986）、絡条体圧痕文は1片も見られない。一方、ほぼ併行すると思われる時期の長野県地方では、絡条体圧痕文土器に神之木台式土器が伴うことはほとんどない。地域的にそれほど遠くない両地域で、これほど異なるものであろうか。あるいは、編年的に修正が必要なのであろうか。東海地方の土器群も含めて今後の伴出関係に注目したい。

以上、中込遺跡の資料を中心に述べてきたが、資料数が非常に限られているうえ遺構にも伴わないもので、分析には限界がある。今後、より正確な伴件関係を把握できる成果が蓄積されることを期待したい。

末筆になったが、本稿をまとめるにあたり、小野正文、保坂康夫、新津康、今福利恵、西桂町教育委員会の方々には文献、助言等で大変お世話になった。記して謝意を表する次第である。

註

1. 子母口式土器に関する研究史については、岸島正明氏の研究に詳しい。
2. 中込遺跡発掘報告書（山梨県教育委員会・山梨県農務部、1990）参照
3. 調査は光波測量器を用いて全点プロットで進め、コンピューターで処理した。
4. 山梨県下では中込遺跡の他に絡条体条痕文土器を出土している遺跡は、南都留郡西桂町の寺野遺跡のみである。当遺跡から出土している絡条体圧痕文土器は、裏面に条痕をもたないものが多いが、裏面に条痕の施されるものもある。断面三角形の貼りつけ隆帯を使用し、隆帯の上にも施文される。表裏の条痕文土器を作出する。編年的にはやや幅をもっていると思われるが、主体は中込遺跡のものより一段階古いのではないかと考えている。
5. 小熊 1989. 小熊氏は資料を詳細に分析し新潟県地方の編年案を示している。そして、その出現と終息を関東地方や東海地方も含めて考えるべきであるとしている。具体的には関東・東海・東北の影響のもとに成立し、東北の縄文条痕系土器群の影響を受けながら収束する傾向が見られるという。注目すべき研究であろう。

引用文献および主要参考文献

- 荒井幹夫ほか 1978・1983 『打越遺跡』（富士見市教育委員会）
奥 隆行ほか 1982 『寺野遺跡発掘報告書』（西桂町教育委員会）
小熊博史 1989 「縄文時代早期終末における絡条体圧痕文の一様相」『信濃』41-4
小沢由香利ほか 1986 『梨久保遺跡』（岡谷市教育委員会）
小野正文ほか 1986 『沢迦堂Ⅰ』（山梨県教育委員会・日本道路公団）

- 神奈川考古同人会編文グループ編 1983 「縄文時代草期末・前期初頭の諸問題 土器集成図録」『神奈川考古』17
- 神奈川県考古同人会 1984 「縄文時代草期末・前期初頭の諸問題、記録、論考集」『神奈川県考古』18
- 紅村 弘 1981 『東海先史文化の諸段階』
- 児玉卓文^{なつか} 1984 『長門町 中道』(長門町教育委員会)
- 小林康男^{ながお} 1985 『堂の前・福沢・青木沢』(塩尻市教育委員会)
- 笹沢 浩^{かず} 1975 『男女倉』(長野県道路公社・和田村教育委員会)『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その5』(日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会)
- 原田昌幸 1984 「格条体圧痕文土器研究の検討の課題」『神奈川考古』18 (神奈川考古同人会)
- 毒島正明 1983 「子母口式土器研究の再検討(上)」『土曜考古』7
- 百瀬忠幸 1986 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』(日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター)
- 守矢昌文^{まさふみ} 1986 『高風呂遺跡』(茅野市教育委員会)
- 宮下健司 1988 「時代と編年 縄文早期の土器」『長野県史 考古資料編4』
- 宮下健司 1989 「東海系土器様式」『縄文土器大観1』(小林達雄編集 小学館)
- 山内清男 1941 『日本先史土器図鑑』(先史考古学会)
- 浅利 司^じ 1990 『中込遺跡』(山梨県教育委員会・山梨県農務部)

関東地方におけるカマド初現をめぐって

森 原 明 廣

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1.はじめに | (2) 「カマド状遺構」の検討 |
| 2.研究史 | (3) まとめ |
| 3.カマド初現期の再検討 | 4.おわりに |
| (1) 炉とカマドの関係について | |

1.はじめに

関東地方においては、古墳時代のある時期に竪穴住居内の火熱処理施設が炉からカマドに取って代わることが知られている。炉とカマドは構造・構築位置・使用目的等に大差がある。また、竪穴住居内の空間利用や祭祀の面でも大きな変化であったろうことからも、生活史上の画期として捉えられるのである。この画期は関東地方に畿内の要素（墓制・祭祀など）⁽¹⁾が明瞭に看取されるようになる時期と重なることから、多くの注目を集めてきた。集落内の一現象からその社会的背景を解明し得る研究題材であったためでもあろう。

本稿はカマドという一遺構から、カマド初現期の社会的背景を解明することを目的とするものである。すなわち、個人あるいは集団の活動の痕跡の一つでもある遺構に検討を加えることにより、社会的、歴史的な背景を探るものである⁽²⁾とも言えよう。最終的には、該期の集落址研究の一部としていきたいと考えていることも記しておきたい。

本稿では特に、関東地方のカマド初現期に見られる「カマド状遺構」を中心に検討をしていくが、先ず先学諸氏による研究を振り返り、研究の現状を確認しておきたい。

2.研究史

カマド初現に関しては、これまでに実に多くの研究がなされてきた。該期の集落址あるいは住居址の調査報告に際しての考察に取り上げられることも多く、それらの全てを挙げることはできない。ここでは、それらのうちでも着眼点の重要な研究や本稿で取り上げる問題と関係の密な研究を中心に見ていくことにしたい。

カマド初現に関する研究は1955年の大場磐雄氏による研究⁽³⁾に始まるが、現在までの研究を概観すると、その見解は二つに大別されるようである。一つは関東地方内でカマドは「発生」したとする説であり、もう一つはカマドは関東地方外（関東地方以西、主に畿内方面を指す）から「導入」されたとする説である。二つに大別される、これらの説が細かく分かれる形で研究は現在に至っていると言える。

1955年の大場磐雄氏の研究は、関東地方に限った研究ではないが、カマド初現研究の先駆として著名である。大場氏は長野県平出遺跡の報告⁽⁴⁾において、『和名抄』の記載⁽⁵⁾などを引用しつつ、炉とカマドの機能差に着眼され、カマドが炊事専用で火熱処理技術の進んだ施設であり、室内空間の利用方法の面でも進歩したことを述べられた。さらに、カマド初現前夜に見られる炉の移動を炉からカマドへの移行過程での事象と捉えられた上で、「大陸文化と共に、竈の概念も知られたが、その實物に對する認識を缺いたため、わが國獨自の方法で竈を設けたもの」とカマドの起源を推考された。大場氏の研究は、炉とカマドの關係を中心にカマドの起源について述べられたものであり、その後の関東地方におけるカマド初現についての研究の出発点となつた。

同じく1955年には大川清氏が東京都落合遺跡の報告⁽⁶⁾において、関東地方におけるカマド初現は、大陸文化の伝播と受容の結果として起きる現象であろうと述べられている。つまり、カマドは「おおいの内部に於ける焚火の構造」を持つことから、烹業技術の影響により現われるものであり、その受容はカマド構築を可能とする建築構造の変化または食糧事情の変化⁽⁷⁾による必要性が容易にしたものと推考された。大川氏はカマド初現の諸条件をもたらしたのは「社会的変革」であるとされ、社会的変革→カマド受容の図式を提示されたとも言ふことができる。

このように、カマド初現についての研究は、関東地方（東国とすべきか）には大陸文化の影響でカマドが「導入」された施設であろうとする説の提示により始まるのである。その後、これらの説に対してカマドは関東地方で「発生」したと考える説が提示されるようになる。

横川好富氏は1963年、千葉県野田市三ッ堀遺跡の報告⁽⁸⁾において、鬼高窓の住居址にカマドが設けられていない例について「カマドがまだ伝播していなかった」とされた。この「伝播」の意味は同氏の1964年、埼玉県松伏町前田遺跡の報告⁽⁹⁾において明示されている。前田遺跡においては、鬼高窓初頭にすでに「完成されたカマド」が検出されていることと埼玉県北西部のカマドが早い時期に現われる状況を合わせ見て、関東地方においては、カマドは内部で「発生」し、それが各地に「伝播」するものと推考されたのである。¹⁰

また、岡田淳子氏は1966年、東京都八王子市中田遺跡の報告⁽¹⁰⁾において古墳時代中期末（和泉期）のカマドに見られる構造から、「火床を馬蹄形に囲っただけの竈」の存在を指摘され、「炉から竈への過渡的な一様相を示す」とされた。炉からカマドへの過渡の状況についての考えは明示されなかったが、「カマド状遺構」の存在に着眼された点で重要であると考える。

カマドが関東地方内で「発生」したと考える説のこの段階におけるまとめとなったのが1966年、和島誠一・金井塙良一両氏の「集落と共同体」¹¹である。古墳時代集落址の変遷と実体に、その成長過程から迫ろうとされた論文であったが、この中で両氏は、関東地方における古墳時代後期の竪穴住居址の大きな変化として「カマドの普遍的な設備」を捉えられた。そして、カマド初現は「熱処理に関する知識の伝来」を要因とするのではなく、「むしろ、在地の竪穴生活の發展の中に、主体的な要因が求められなければならないもの」とされた。カマド初現前の「効率的な熱利用や自律的な竪穴生活」に進んだ炊事施設としてのカマドを発生させるべき条件が十分に整っていたとされたのである。鬼高窓に見られるカマドの急速な普及も「自律的な

堅穴生活」が進行していたからこそその事象であろうとされている。

和島・金井塚兩氏の説を継承したとも言える研究には、1975年の高橋一夫氏による「和泉・鬼高窓の諸問題」⁵⁴が挙げられよう。同氏は和泉・鬼高窓の「初期カマド」として、堅穴住居の壁面に切り込みがない、あるいは少ない煙道が未発達のカマドの類例を挙げられた。そして、和泉期の「機能的には初期カマドと変わらないと思われる遺構」との関係について述べられ、「和泉期に見られた熱処理の方法が発展してカマドへ転化」したとされた。さらにこのカマドへの転化は「一定地域で発生し波及したというものではなく、おそらく関東では多源的に発生したのではないか」と推考された。各地への波及については、各地において時期的なばらつきが見られることから、「社会が一定の発展段階に達した時に受け入れられた」とも推考されたのである。

この前後からカマドは関東地方内で「発生」したとする説に対し、否定的な論考が多く見られるようになる。

佐々木達夫氏は1974年、「古代村落の変遷過程」⁵⁵において、古墳時代集落の個別資料を統計処理することにより、村落の実態究明に迫ろうとされた。同氏は各期のカマド普及率やカマドと支脚の関係などから、カマド初現について考察された。そして「かまどは完成されたかまどとして移入されたものであろう」と推考された。

石野博信氏は1975年、「考古学から見た古代日本の住居」⁵⁶において全国的な視野でカマドの初現を推考された。特に関東地方についての考察はないものの、「カマドの発生は（中略）弥生時代後期の頸カマドから近畿地方において漸移的に形成されたように考えられる」とされ、その後に全国へ伝播したものと推考された。

笠森健一氏は1978年、埼玉県上福岡市川崎・長宮遺跡の報告⁵⁷において、カマドは畿内において「頸カマド」から発展・発生し、全国へ伝播したとする説⁵⁸を支持するとともに伝播の過程を推考された。さらにカマドの受容は精神生活面での受容も伴うものであり、この点からも関東地方内のカマドの「発生」は否定できることを指摘されたのである。

谷井彪氏は1979年、埼玉県美里町畠中遺跡の報告⁵⁹において、特にカマドの波及について社会の発展段階を重視された高橋氏の説⁵⁹に対して、「かまど導入の早い地域と遅い地域では消費生活の自律化や社会の進展に違いを見出せない」と述べられ、関東地方内のカマドの「発生」説を否定された。

谷旬氏は1982年、「古代東国のカマド」⁶⁰において、東日本を中心としたカマドの形態分類と総合的な研究を行なわれた。谷氏はその成果とともに、関東地方におけるカマドの初現について考察を述べられた。谷氏によると「初現期のカマドは埼玉県北部に限定でき」、いわゆるヘッツイ⁶¹からカマドは「一元的に発生し、急速に波及していった」とされている。しかし、谷氏の言う「発生」は関東地方外からの影響を受けた上でのことであると考えられ、「導入」説の一部とすることができる。

笠森紀己子氏は1982年、「かまどの出現の背景」⁶²において、関東地方に前方後円墳が出現する時期を5世紀後半とされた上で、カマド初現の時期と重なることに着眼された説を述べられ

た。同氏によれば、カマドは「畿内王権の政治秩序下」で「労働力貢納とそれに伴う携行食としての大量の穀生産が必要とされ」たために「導入」されたと推考された。カマド初現は「共同体の枠を越えた労働力の組織化」の表われと捉える同氏の説は、1971年の原島礼二氏の「日本古代社会論」²⁶に見られる説と通じるところがある。原島氏は「王権と坂東地方の支配集団との支配服属関係」に着眼され、在地の支配集団は「大和政権」に労働力を貢納し、「大和政権」は「支配のための技術や物資」としてカマドを与えていたと推考された。笹森氏、原島氏の説はカマド初現は「畿内政権」との関係に主張的な要因を求める代表的な例である。

関東地方内においてカマドが「発生」したと考える説に対しては、様々な否定的説が提示された。これらに対して高橋一夫氏は、前述した説²⁷に再検討を加えた上で、訂正をされた。同氏は「生活遺構・遺物の変化の意味するもの」²⁸において、「家父長の世帯共同体」の成長を要因とする「発生多元説」は成立し得ないものとし、笹森氏²⁹・原島氏³⁰の説に代表される「畿内政権」との関係を重視した「導入」説を支持された。

高橋氏の例にもわかる通り、現在では関東地方においてはカマドは「導入」されたものであると考える説³¹が主流となっている。しかしながら、「発生」説はカマド初現の研究に多くの問題点を提示し、研究の進展上に有意義であったと考える。

3. カマド初現期の再検討

関東地方におけるカマド初現に関する研究史を振り返り、カマドは「導入」されたものであり、その背景には「畿内政権」と在地支配集団との支配服属関係の存在を考える説が現在の主流となっていることを見た。関東地方においては、カマドが「発生」し得ないものと著者は考えている。ここでは先ず、カマド初現以前に竪穴住居内で火熱処理施設として使用されてきた炉とカマドの関係からその論範について述べたい。主として炉とカマドの位置・機能差の面から検討するものであり、その後で初現期カマド（特に「カマド状遺構」として区別する）の再検討を試みたい。

(1) 炉とカマドの関係について

先ず、炉とカマドの構築される位置から見ていく。炉は基本的には竪穴の壁面から離れた位置（竪穴の中心を意識した位置）に構築されるものであるのに対し、カマドは竪穴の壁面に構築されるものであることは言うまでもない。この点を基本として捉えた上で、以下の問題について触れていく。

a) いわゆる「炉の移動」について

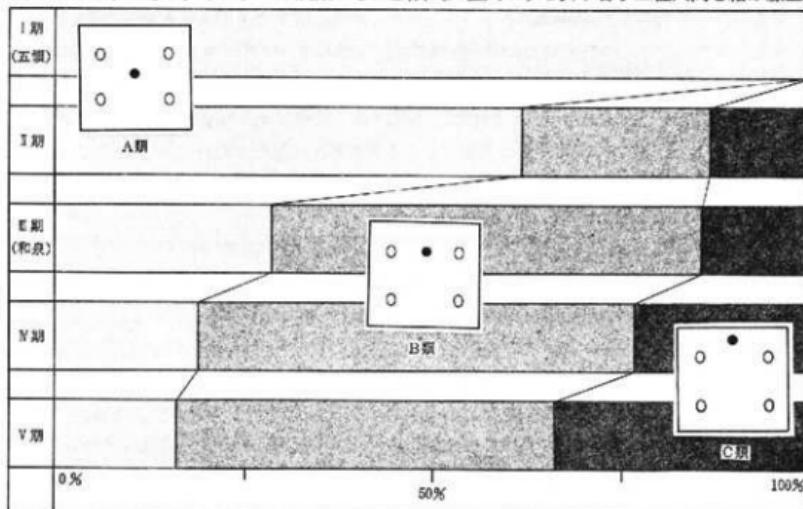
位置から見た問題の第一点として、いわゆる「炉の移動」についての問題³²が挙げられる。関東地方においては、カマド初現前（弥生末～古墳前期）の状況として、炉が竪穴の中央部からどちらか一方の壁面に近寄る（移動する）傾向があるとして、カマドが炉から漸移的に「発

生」したものと考える説の論拠となっていた。カマドが竪穴の壁面に構築されることから、炉が壁面へ移動した結果の産物がカマドであると考えたものであろう。

それでは、実際に「炉の移動」は認められるのか否か、またカマド初現との関係はどのように捉えられるのか見てみよう。この問題について、具体的な資料検討をされたものとして、栃木県岩舟町赤羽根遺跡の例が挙げられよう。赤羽根遺跡においては、カマド初現前から初現までの時期（五領～鬼高期）について連続と続く集落址が検出されており、炉とカマドの位置関係についての検討に良好な遺跡例である。宮崎朝夫氏は調査報告に際し「炉の移動」についての検討をされた¹⁰。宮崎氏は炉と柱穴の位置関係に着目され以下の分類をされた。

- A類－中央（四柱穴を結ぶ線内）に位置する。
- B類－四柱穴のうち隣り合う二柱穴を結ぶ線上に位置する。
- C類－四柱穴を結ぶ線より外側（壁面寄り）に位置する。
- D-1類－無柱ないしは未検出だが、炉は中央部に存在する。
- D-2類－無柱ないしは未検出だが、炉は壁面寄りに位置する。

以上の分類をもとに、赤羽根遺跡でカマドが初現する赤羽根VI期前のI～V期（五領～和泉期）の炉の位置分類を整理すると（第1図）となる。この結果からは、竪穴の中央部に位置する炉は時期が降るに連れて徐々に減少し、逆に四柱穴のうち隣り合う二柱穴間を結ぶ線上に位置する炉が増加する傾向が見られる。しかしながら、炉が壁面に寄って位置することは少ないことが判り、少なくとも赤羽根遺跡では、カマド初現が近づくにつれて、炉が壁面へ近づく傾向はないようである。また、この成果からはB類（四柱穴のうち隣り合う二柱穴間を結ぶ線上



第1図 赤羽根遺跡における時期別に見た炉の位置
(宮崎朝夫氏による分類結果より作成)

に炉が位置する)の増加現象が注目される。喜谷美宣氏はこの問題について、「炉が二本柱の間に設けられるのは、炉の真上に入母屋造の屋根の妻部を位置させて、煙出しの役目をはたせようとする配慮と考えるべきかも知れない」とされている³³。喜谷氏が述べられたように、炉の位置は堅穴住居の上屋構造と密な関係があったと考えられる。いわゆる「炉の移動」は決して壁へ向かっての移動ではなく、あくまで四本柱のうちの隣り合う二柱穴間への移動であろうことは赤羽根遺跡の例からもうかがえよう。つまり、「炉の移動」はカマド初現に直接結がるものではないと考えられるのである。

b) 炉とカマドの概念差

カマドは炉の発達したものであると「発生」説では考えられていた。しかし、炉とカマドはその構築位置から見て、別系統と考えられる概念差が存在し、分けて考えることが必要である以下、炉とカマドの概念差について述べる。

炉が堅穴住居の壁面から離れた位置(住居の中心を意識した位置)構築されるのに対し、カマドは堅穴住居の壁面に構築される。このことは単なる位置差ではなく、堅穴住居内の空間利用についての大きな概念差を示していると考えられる。この問題については、柿沼幹夫氏による埼玉県下田・諏訪遺跡の報告に際しての、堅穴住居内の空間利用とカマドの関係の考察に詳しく述べられている³⁴。柿沼氏はカマドの位置と貯蔵穴・入口の関係に着眼され、この「三者が直結したことは堅穴住居内に「厨房」=「台所」=「勝手」=「土間」が設定されたことを意味している」とされた。つまり、炉を備える堅穴住居においては、「空間利用=間取りの概念が、不明確」であるとされ、カマド初現が堅穴住居内の空間利用の概念に大きな変革をもたらしたものと考えられたのである。(柿沼氏はカマドとともに「導入」されたものと考えられている。)

また、仲野紀己子氏は埼玉県大久保山遺跡の報告に際して、炉やカマドを使用する際の人間の向きに着目され、「カマド使用時には、使用者は壁の方へ向いているのに対し、炉の使用者は住居中央を向いていたであろう」とされた³⁵。仲野氏は「カマドの発生は、炉からの漸移的変化と考えるよりも、「在地の堅穴生活の発展」という素地の上に加わった外的要素が重要な契機となったと考えたい」とされている。炉とカマドの位置差が使用する者の意識差(概念差)を示していることを考察した例としてあげられよう。

両氏が述べられたことからも、炉とカマドには大きな概念差が存在していたであろうことが窺える。また、位置差のみでなく、機能差を合わせ考えることも可能である。つまり、炉とは炊事・採暖・採光などの諸機能を合わせ持つ施設であり、堅穴住居の中央ないしは中央を意識した位置に構築される必要があったと考えられる。炉は全ての生活の中心たる施設であったとも言えよう。これに対して、カマドは基本的には炊事を専用とする施設であり、炊事の場の中心となる施設である。カマドの存在は炊事の場が住居内で独立したことを示すのであり、そのことが位置差に表われているとすることもできよう。さらに、カマドの初現は炉の持つ炊事以外の機能(採暖・採光等)を何か別の形で補なうことが可能になったこと³⁶も示しているとも言える。具体的に何が炉の機能を補ったのかについては不明であるが、急速とも言えるこの変化は、カマドが「導入」された状況を示しているものとも考えられる³⁷。

以上のように、炉とカマドの間には大きな概念差・機能差が存在するのである。換言すれば、炉はどれだけ発達しても炉であり、カマドを延長線上に置く施設ではない。少なくとも関東地方においては、カマドは「発生」することではなく、カマドを取り巻く諸要素（概念・機能・その他）とともに「導入」された施設であると考えられるのである。

(2) 「カマド状遺構」の検討

関東地方においては、炉とカマドは直接に繋がる施設ではないと考えることを確認した上で、初現期カマドの再検討を試みたいと思う。

現在までの研究あるいは報告を見ると、初現期カマドはかなりの幅（時間・地域・形態等）をもって取り扱われる事が多い。ここでは、それらのうちでも特に初現期カマドとして捉えられ、また炉からカマドへの過渡的な遺構（「発生」を裏付ける遺構）として取り上げられてきた「カマド状遺構」について述べていきたいと思う。

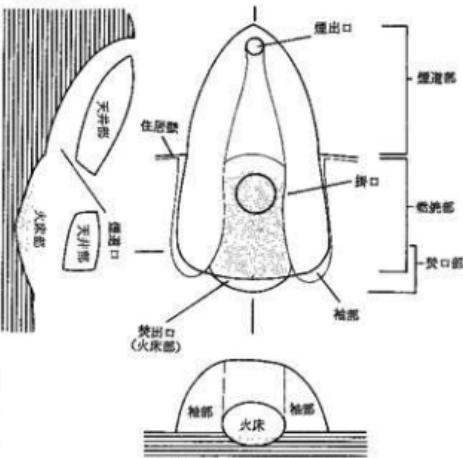
「カマド状遺構」とは、他の呼称も多く見られるが、以下のように限定して捉えられる。

1. カマドの構造（第2図）が袖部と天井部により火熱を包む構造を持つものに対し、「カマド状遺構」は天井部あるいは明瞭な袖部さえも欠き火熱を包む構造を持たないものである。さらに天井部あるいは袖部を持たないことからトンネル状になる煙道部が存在し得ない構造であることも重要である。

2. 「カマド状遺構」が構築される位置は竪穴の壁面あるいは壁面に近く近い位置であり、いずれにせよ壁面を意識した位置と言えよう。

「カマド状遺構」は以上のような構造上の特色が見られるものである。少々煩雑ではあるが、「カマド状遺構」は構築される位置などからカマドとして捉えて良い施設であるが、構造上の差違からカマドとは一線を画して考えるべき遺構である。「カマド状遺構」は構造が炉と類似することから、炉からカマドへの過渡的な遺構と捉えられたこともある。この場合、「カマド状遺構」は炉の発展形とされ、いわゆる「発達した炉」の延長上にある施設と捉えられたようである。しかし、前項で見たように炉はあくまで炉であり、「カマド状遺構」はその構築位置・構造等からカマドの範疇で捉えられる施設である。

「カマド状遺構」の基本的な構造については前述したが、類例を見るといいくつかの形態に分



第2図 カマドの構造および部位名称

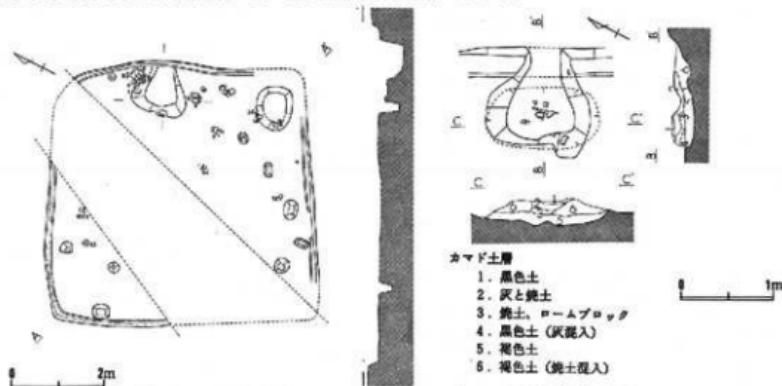
類することができると思われる。ここでは特に竪穴の壁面を中心に見た構築位置の差違から分類し、類例を挙げてみる。

I類

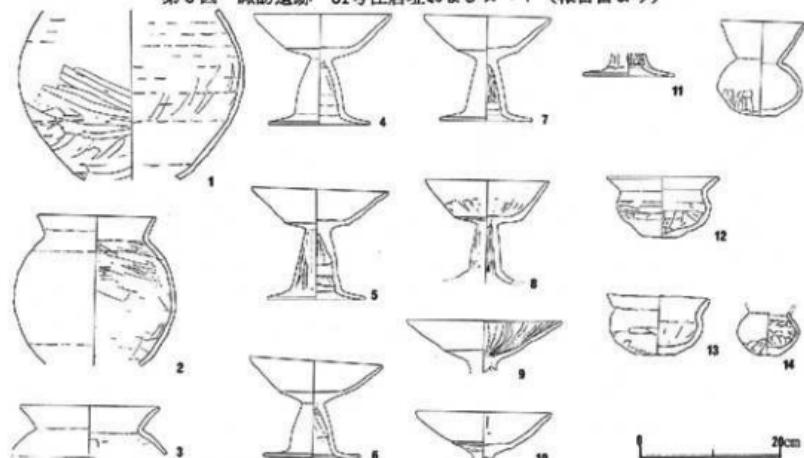
竪穴住居の壁面に完全に接して（壁面を利用して）構築される。さらに、焚口部を除いて火床部を囲うような高まり（袖部としても良いだろう）の存在が認められる構造である。

埼玉県本庄市諏訪遺跡 31号住居址（第3図・第4図）^⑨

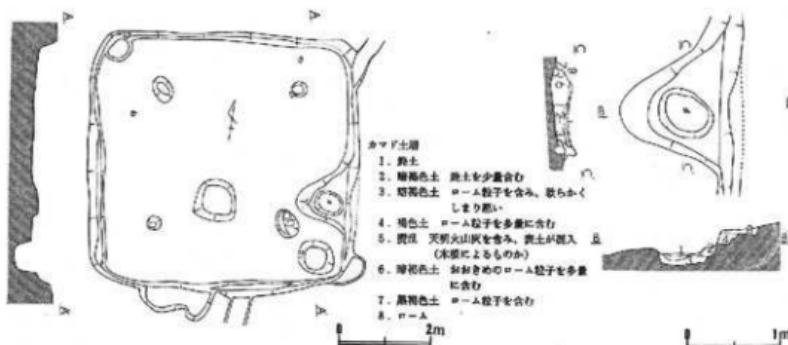
出土遺物によれば、時期は和泉Ⅱ期の範囲に含まれるであろう。報告書によれば、本来は上部構造（天井部）が存在した旨があるが、その検出状況からは天井部が存在しなかった可能性があると考えられる。同遺跡の30・32号住居址も同様であろう。



第3図 諏訪遺跡 31号住居址およびカマド（報告書より）



第4図 諏訪遺跡 31号住居址出土遺物（報告書より）



第5図 二本松遺跡 13号住居址およびカマド（報告書より）

Ⅱ類

竪穴住居の壁面に完全に接して（壁面を利用して）構築される。しかし、明瞭な袖部の存在は認められず、火床部を掘りくぼめただけ、あるいはそれに近い構造である。

埼玉県本庄市二本松遺跡 13号住居址

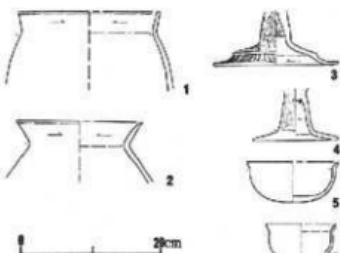
（第5図・第6図）²⁸

出土遺物によれば、時期は和泉Ⅱ期の範疇に含まれるであろう。報告書によれば「カマド」は床面を掘りくぼめ、「暗褐色土等」で一旦埋めた後、火を焚いたらしい。袖部は認められず、焼土が堆積し、高まるのみである。「カマド」の中心には高杯脚部片が残存し、おそらく転用支脚であったと推測される。

埼玉県本庄市将監塚遺跡 H-1号住居跡

（第7図・第8図）²⁹

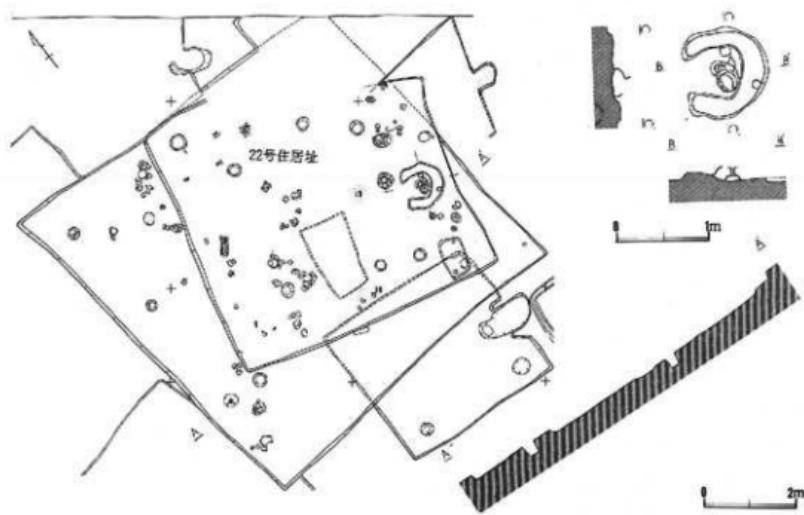
出土遺物は少ないが、その時期は和泉Ⅰ期の範疇に含まれよう。報告書によれば「カマド」は壁際に「焼土・炭化物を含む層が堆積している程度」である。床面の掘りくぼめは僅かではあるが認められる。「カマド」内には高杯支脚部（第8図-2）が残存し、転用支脚であろうと推測される。



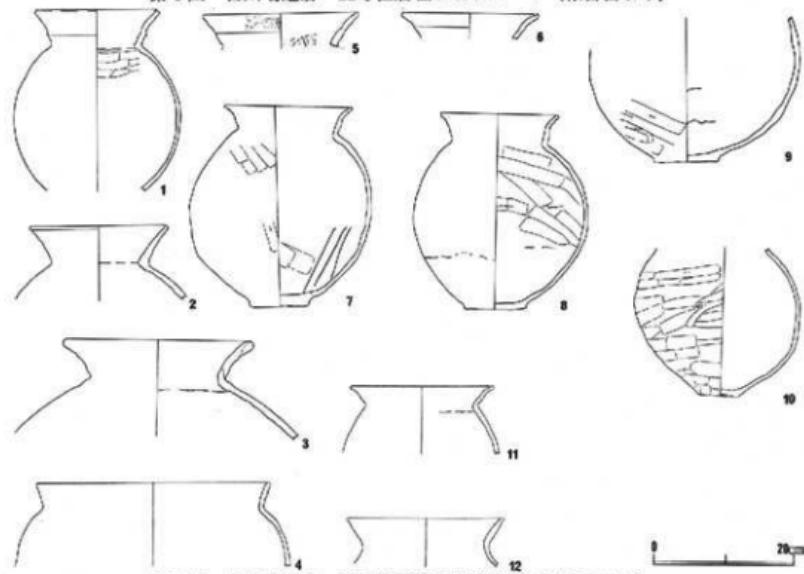
第6図 二本松遺跡 13号住居址
出土遺物（報告書より）



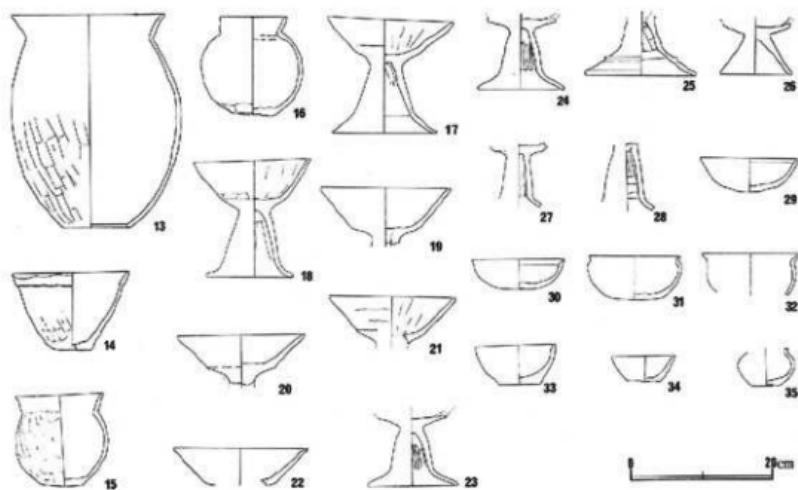
第7図 将監塚遺跡 H-1号住居跡・カマド
および出土遺物（報告書より）



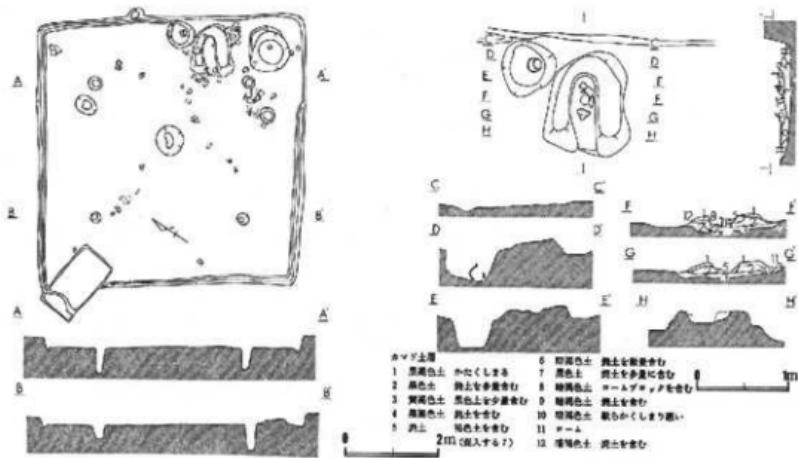
第8図 古川瑞遺跡 22号住居址およびカマド（報告書より）



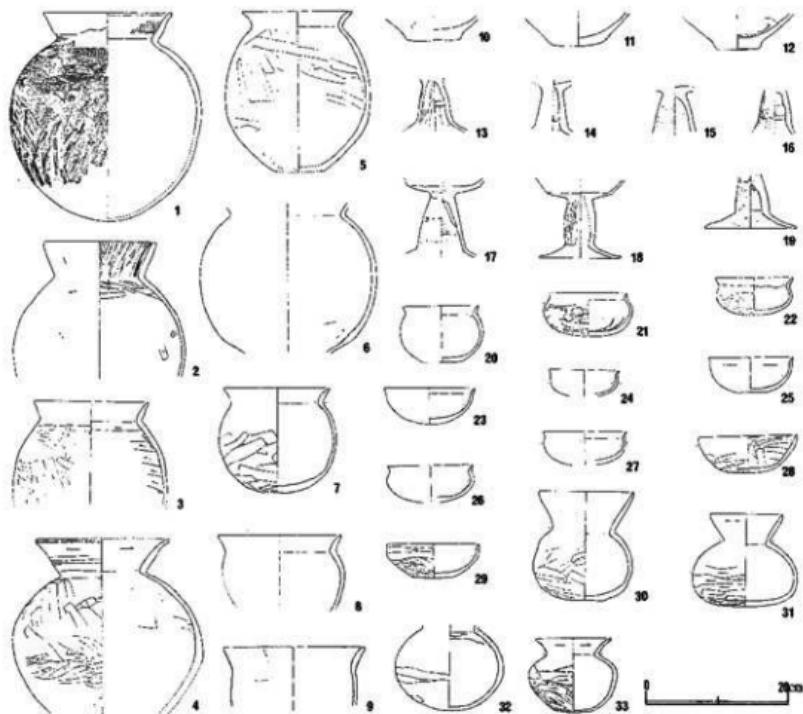
第9図 古川瑞遺跡 22号住居址出土遺物(1)（報告書より）



第10図 古川瑞遺跡 22号住居址出土遺物(2) (報告書より)



第11図 二本松遺跡 17号住居址およびカマド (報告書より)



第12図 二本松遺跡 17号住居址出土遺物（報告書より）

Ⅲ類

堅穴住居の壁面から離れた位置に構築される。さらに、焚口部を除いて火床部を囲うような高まりが存在する構造である。

埼玉県本庄市古川端遺跡 22号住居址（第8図・第9図・第10図）³³

出土遺物は多く、特に大型瓶（第10-13）と小型瓶（第10図-14）が併存することなどが注目されるが、おおむね和泉Ⅱ期の範疇でとらえられる様相を示すと考えられる。「カマド」は粘土質土をもって構築されており、壁面から約20cm程離れた位置にある。上部構造（天井部）が存在していたとは考えられず、粘土を馬蹄形に低くめぐらせていたに過ぎないであろう。「カマド」内には高环脚部が残存し、転用支脚であろう。

埼玉県本庄市二本松遺跡 17号住居址（第11・12図）³⁴

出土遺物によれば、時期は和泉Ⅱ期の範疇に含まれると考えられる。報告書によれば、「カマド」は壁面から約10cm離れた位置にある。床面の掘りくぼめも認められ、暗褐色土で一旦埋めて逆に高めている。馬蹄形の高まりは、焼土混じりの黒色土で構築されている。高さは8cm～

15cmと低い。「カマド」内には高环脚部が正位で残存し、転用支脚である。

以上のように「カマド状遺構」をⅠ～Ⅲの3種に分類した。より細かい分類も可能であろうが、現在のところは、構築位置・構造の差を中心に大まかな分類を試みたものである¹²。

これらの「カマド状遺構」を備える堅穴住居は出土する土器から和泉Ⅰ期末～Ⅱ期前半に該当すると考えられる。Ⅰ～Ⅲ類が時間的な前後関係をもって捉えられるかどうかは、土器編年での再検討が必要であり、現在のところは詳細について立ち入ることはできない。しかし、概観したところでは、Ⅰ～Ⅲ類について時間的前後関係は認められず、混在する傾向があるようと考えられるのである。

それでは、Ⅰ～Ⅲ類の存在あるいは「カマド状遺構」そのものの存在は何を意味するのかについて述べてみたい。「カマド状遺構」は從来、炉の発展形と捉えられたり、また初現的なカマドとして捉えられたりした。「カマド状遺構」が炉の発展形ではないと考える点については前述した通りであり、ここでは初現的なカマドとして「カマド状遺構」を捉えた際の意味について考えていく。

「カマド状遺構」に限らず、初現期のカマド（袖部・天井部により火熱を包む構造を有すと考えられるもの）については、以前から齊一性¹³の存在が唱えられてきた。例えば、

1. 高環・小型壺などの土器を完形あるいは一部壊したうえで、転用支脚として用いることが多い。

2. 煙を屋外へ排出する煙道部が存在しない、あるいは壁面への掘り込みが非常に短かく未発達であることが多い。

などである。1については「カマド状遺構」の場合、その構造に要因が求められよう。つまり、「カマド状遺構」は天井部が存在せず、掛口を持たないため土器が安定しなかったであろう。この欠点を補い、また土器底部に火熱を集中させ効果的利用を計るために転用支脚を用いたものと考えられよう。ただし、この時期の転用支脚の利用については祭祀的な要因が存在したであろうことも指摘されており、カマド祭祀行為の問題全般を含めて再検討を要すると考える。

2については「カマド状遺構」の場合、袖部と天井部から成る火袋部を持たない構造であり、トンネル状を呈す煙道部により屋外へ直接に排煙することは不可能であったと考えられ、半ば当然のこととも言えよう。ただし、初現期のカマド（トンネル状を呈す煙道部の構造を持つと考えられるもの）についても、屋外へ延びる煙道部が短かく未発達であることはカマド初現の状況の一面向を示しているものと考えられる。これについては後述する。

齊一性と見られてきた1. 2の各項目について「カマド状遺構」を中心に考えてみたが、果たしてこれらを齊一性と捉えてよいものかどうか疑問が残る。つまり、齊一性と見られてきた項目はいづれも構造上の欠点に起因するものであり、「カマド状遺構」がカマドと比較して、不完全な施設であったことを示すに過ぎないのでないかと考えられる。「カマド状遺構」に後続すると考えられる初現期のカマドにも、齊一性と見られてきた1. 2の様な項目が残存することも重要である。つまり、不完全な「カマド状遺構」が徐々に完成していく、換言すればカマドの具体的な受容が進行していく過程上において、初めて説明されるのではないだろうか。

「カマド状遺構」は前述した分類からも言えるように、様々な不完全な構造をもって現われ、徐々に完成していくものと考えられる。

(3)まとめ

「カマド状遺構」の再検討を試みたが、ここで一応のまとめを述べておきたい。

関東地方においては、カマドは「導入」されるものであり、その社会的背景に「畿内政権」の影響があるとする考えが現在の通説であると言えよう。つまり、「畿内政権」の支配的な影響を受けた在地首長層は一般民衆に生産物や労働力を貢納させ、その代償あるいは必要性からカマドを含めた技術や物資を与えていたと考えられるのである。

この考え方に基づけば、カマドは「与えられた」当初から、ある程度は完成された構造をもち、その機能を発揮しなければならないだろう。カマドが「与えられた」施設であるとすれば、それは「与えた」側に何らかのメリットがあったと考えなければなるまい。そのメリットを最大限に得るために、カマドは不完全な施設であってはならなかつたのではないだろうか。しかし、関東地方においては、カマドは「カマド状機構」という不完全な構造の施設で現われているのであり、後続すると考えられる初現期のカマドについても、ほぼ完成した構造（袖部と天井部から成る火袋部を持ち、トンネル状を呈す煙道部を持つ）を持つもの、煙道部の構造などに不完全な要素が残存するものである。関東地方に完成したカマドが現われるのは鬼高期内に入ってからのこととも言える。これらのことから、関東地方におけるカマドの初現には、いくつかの段階を考える必要があろうかと思う。

「カマド状遺構」は和泉Ⅰ～Ⅱ期にかけての時期に限って見られ、地域的にも限定される。しかも、数量的にも少ない施設である。このことは、関東地方において具体的にカマドが「導入」される以前に、抽象的なカマドの知識を自律的に取り入れていた地域があったことを示しているものと考えられる。この地域とは、埼玉県北西部や群馬県南西部に代表される地域であり、交通的な面から見て、関東地方以西との接触が早かった、あるいは強かった地域⁴⁸であり、それゆえの現象とすることもできよう。ただし、そこに「畿内政権」の支配的な影響があったとは考えられず、あくまで技術面での「導入」があったに過ぎないと考える。

「カマド状遺構」はカマドの概念に基づく施設であり、「導入」されていることは間違いないものと考える。「カマド状遺構」は不完全な構造で現われた後、初現期のカマドへ不完全な要素を残存しつつ発展（移行）し、完成されたカマドへと近づいていくものと考えられる。ただし、このようなカマド初現の段階が存在することは「カマド状遺構」の見られる地域のみに限定されるとも考えられる。関東地方においては各地域ごとあるいは各集落ごとにカマド初現の特性が存在すると考えられる。各地域・各集落についての検討を行うことによって、より明瞭に関東地方におけるカマド初現の状況やその背景に近づくことが可能と考える。また、特に中部地方など関東地方以西の地域におけるカマド初現の状況の検討を行なうことも欠くことができず、合わせて今後の課題としておきたい。

4. おわりに

本稿では、関東地方におけるカマド初現について再検討を試み、そこから抽出される問題点より、カマド初現期の社会的背景の一端に迫ることを当初の目的としていた。しかし、カマドは「カマド状遺構」も含めて、遺構としての残存が非常に悪い状態であることが多く、検出が困難で使用時の状況を完全に復元して見ることも困難である。これらの条件下で「カマド状遺構」の存在を述べ、考察を行なうことは無理があったかも知れない。その結果、カマド初現の段階を推定するにも、時期差や地域差の細かい検討を欠き、非常に曖昧なものになってしまった懸念がある。筆者浅学のゆえであり、先学諸氏の御叱正をお願いする次第である。

(1990. 3. 24)

註

1. 前方後円墳や須恵器窯を指す。各々の出現時期についての研究も進められているが今回は取り上げない。
2. 寺社下博による集落址研究についての考え方を参考にしている。
寺社下博 1981 「古墳時代住居の廃棄に関する問題点」『先史』12 109 p～132 p 駒沢大学考古学研究室
3. 大場磐雄 1955 「土師式住居址から見た問題」『平出（長野県宗賀村古代集落の総合研究）』 228 p～237 p 平出遺跡調査会
4. 註3と同じ
5. 『倭名類聚鈔』(931～938年)を指し、「比多岐」(炉)や「加万」(窯)の記載を大場氏は引用された。
6. 大川清 1955 「カマド小考」『落合（東京都新宿区落合遺跡の調査）』 80 p～86 p 早稲田大学考古学研究室
7. 食糧事情の変化とは大川氏によると、「稻作農耕によって（中略）生産量は増大し、（中略）他の穀類も相当に生産されるにいたった」と同時に調理法が変化したこととされている。
8. 横川好富 1963 『千葉県野田市三ヶ堀遺跡』 野田市博物館
9. 横川好富 1964 『松伏村前田遺跡』松伏村教育委員会
10. 横川氏は埼玉県北西部（埼玉県本庄市周辺）を全国的にもカマド出現の早い時期と捉えていたが、その後、「北九州地方にまず最初に出現するもの」と推考され、関東地方についても再考を提言された。
横川好富 1987 「窯の出現とその背景」『埼玉県の考古学』 p 361～p 380 新人物往来社
11. 冈田淳子 1966 「総括（住居址）」『八王子中田遺跡（資料編1）』 91 p～95 p 八王子市中田遺跡調査会

12. 和島誠一・金井塙良一 1966 「集落と共同体」『日本の考古学』V 158 p～187 p 河出書房新社
13. 高橋一夫 1975 「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究』I 64 p～105 p 原始古代社会研究会
14. 佐々木達夫 1974 「古代村落の変遷過程—東国の大窓穴住居址—」『原始古代社会研究』I 原始古代社会研究会
15. 石野博信 1975 「考古学から見た古代日本の住居」『家』 76 p～192 p 社会思想社
16. 笹森健一 1978 「奈良・平安時代の諸問題」『川崎遺跡(第3次)・長宮遺跡』 上福岡市教育委員会
17. 石野博信氏の説を指す
註15に同じ
18. 谷井彪 1979 「遺構について」『畠中遺跡』 美里村畠中遺跡調査会
19. 註13に同じ
20. 谷匂 1982 「古代東国のカマド」『研究紀要』7 223 p～248 p 千葉県文化財センター
21. 谷匂氏による形態分類では「O類」「いわゆるヘツツイ」として区別され、「初現期のカマドは埼玉県北部に限定でき」O類からA類(「壁への切り込みがまったくみられず、袖を平行か「ハ」字形に並べ、カマドの内外を区画しただけの形」)が生じるであろうことを述べられている。
註20に同じ
22. 笹森紀己子 1982 「かまど出現の背景」『古代』72号 38 p～48 p 早稲田大学考古学会
23. 乾飯・強飯とも呼び、蒸し米を原料とする。
24. 原島礼二 1971 「日本古代社会論」『現代歴史学の課題』上巻 青木書店
25. 註13に同じ
26. 高橋一夫 「生活遺構・遺物の変化の意味するもの—竈と鉄製農具」『李刊考古学』第16号 67 p～70 p 雄山閣出版
27. 註22に同じ
28. 註24に同じ
29. 大村太郎氏は東アジアに広く分布する竈起源神話から見た日本におけるカマド初現について考察されている。
大林太良 1985 「董刈以前—竈と夫婦・家族—」『岩波講座日本考古学報』23 p～5 p
30. 「炉の移動」についての考察は大場磐雄氏に始まる。
註3に同じ
31. 宮崎朝夫 1984 「遺構に関する成果と問題点」『赤羽根(本文編)』444 p～475 p 栃木県文化振興事業団
32. 喜谷美宜 1966 「住居と建築」『日本の考古学』V 138 p～157 p 河出書房新社
33. 柿沼幹夫 1979 「住居址について」『下田・諏訪』 155 p～172 p 埼玉県教育委員会

34. 仲野紀己子 1980 「カマドについて」『大久保山I』 303P～305p 早稲田大学本庄校
地文化財調査室
35. この点については、小出義治氏によれば「カマドによる炊飯・油脂による照明、衣服の質
的改良による防寒」とされ、「生活内容の合理化と向上につながる」とされている。また、
玉口時雄氏は同様に皿形土器を照明具として捉えられた。
- 小出義治 1970 「住居と集落」『新版考古学講座』5 P343～p363 雄山閣
- 玉口時雄 1971 『秩父』 秩父市教育委員会
36. 祭祀や信仰の問題を含めた考察は笠森健一氏（註16に同じ）や谷井彪氏（註18に同じ）な
どに見られる。
37. 柿沼幹夫ほか 1979 『下田・諏訪』埼玉県教育委員会
38. 長谷川勇ほか 1979 『二本松遺跡発掘調査報告書』 本庄市教育委員会
39. 井上尚明ほか 1986 『将監塚・古井戸（古墳・歴史時代編I）』 埼玉県埋蔵文化財調査
事業団
40. 小久保徹ほか 1978 『東谷・前山2号墳・古川端』 埼玉県教育委員会
41. 註38に同じ
42. A～C類ののほかにも、住居の壁面から離れた位置に構築され、補も認められない形態を
挙げることも可能であるが、明確ではないため今回は除外にした。
43. 多くの先学諸氏により指摘されているが、特に転用支脚については笠森健一氏（註16に同
じ）が代表的である。
44. 埼玉県北西部や群馬県南西部以外にも、これらの条件を満たす地域は他にも存在すると考
えられ、それらの地域との比較検討も必要である。

立石遺跡発掘調査報告

—1989年国道358号線拡幅等に伴う調査—

保坂康夫

1. はじめに

- 2. 遺跡の立地と環境
- 3. 調査経過と調査方法

4. 先土器時代の遺物

- 5. 古墳時代前期の遺構・遺物
- 6. おわりに

1. はじめに

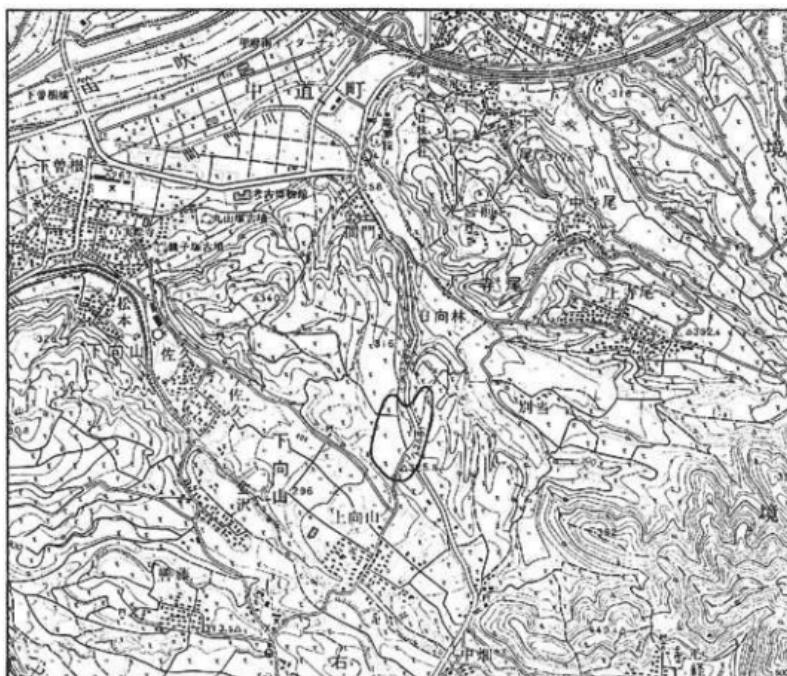
立石遺跡は、甲府盆地南縁部に東西に連なる曾根丘陵上に位置する。東八代郡中道町上向山に所在し、東西180m、南北280mにおよぶ大規模な遺跡である。すでに、1980年に甲斐風土記の丘建設に伴い発掘調査がなされており、縄文時代前期・中期、弥生時代後期から古墳時代前期の住居址群や方形周溝墓、先土器時代の石器群が確認されている。この報告については、近々なされる予定である。

今回報告するのは、1988年度に行った、国道358号線拡幅等に伴う発掘調査での成果である。特に注目されるのは、ATより下位から出土した先土器時代の石器群である。AT下位から出土した石器群については、県内では、都留市の菅野川上流にある一杯窪遺跡⁽¹⁾につき2例目の発見である。この他、古墳時代前期の若干の遺物と遺構が出土した。

2. 遺跡の立地と環境

立石遺跡の立地する曾根丘陵は、西は市川大門町の芦川から、東は八代町の浅川までの、東西約13km、最大幅約3kmの段丘状の地域である⁽²⁾。北面を笛吹川が流れ、南面に御坂山地がそびえる。北面には、比高50m程度の崖線が発達する。また、その前縁には、坊ヶ峰、米倉山といった小丘が配列する。曾根丘陵を形成する堆積物は曾根層群と呼ばれ、背後の御坂山地から供給された礫を主体とする扇状地堆積物、県北部にある黒富士や八ヶ岳が起源となる火砕流や岩屑流、シルト層や珪藻土層からなる局地的な湖成堆積物などからなる。丘陵北面は、北東—南西方向の断層がみられ、この影響で甲府盆地底部との段差が生じた構造性の段丘である。また、丘陵内にもいくつかの段差がみられ⁽³⁾、断層の影響による地形の発達が考えられる。

曾根丘陵上では、一般的にいわゆるローム層が見られる。おおむね、その最下部に御岳火山第1砾石層（Pm-1）がみられ、その上に最大3mほどの層厚で発達する。ローム層はその上部に明瞭ないわゆる黒色帯を一枚挟在する。黒色帯以下は、非常に硬質なハードローム層で、黒色帯より上では、明褐色のソフトローム層である。なお、黒色帯最上部からソフトローム層



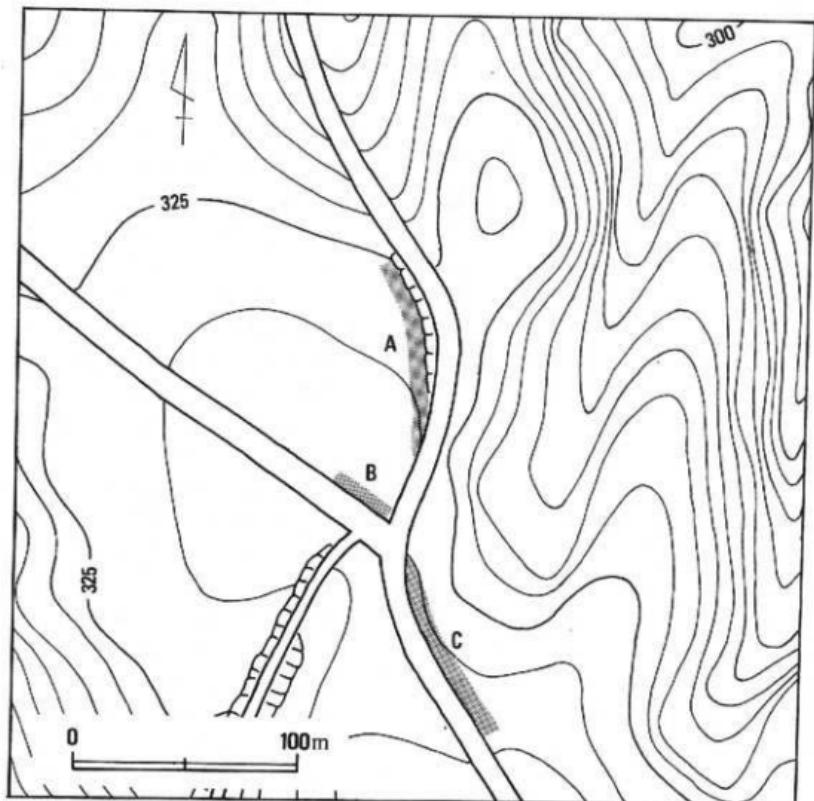
第1図 立石遺跡位置図 (25000分の1、中央実線が遺跡範囲)

下部にかけて始良Tn火山灰 (A T) が確認されている。この件については、河西学氏の研究成果を本紀要に掲載したので、参照いただきたい。

本遺跡の立地をみると、東を間門川、西を滝戸川によって開析された崖線をもつ、南北に長い台地状の地形のほぼ中央部に位置する。遺跡の立地する地点は非常に平坦であるが、その西侧が谷状の地形によって区画される。また、遺跡の北側、東側にも、北方より谷状の地形が入り込んでいる。

今回調査した地点は、東八代郡中道町上向山字北原に所在する。調査地点、特に先土器時代と古墳時代前期の遺物が出土した地点付近の地形は、北から入り込んだ谷状の地形の最奥部で、平坦な地形の中でもやや高まりをもつ部分である。西方へは平坦面が連続するが、東方へは地形が傾斜してゆき、崖線に至る。

本遺跡周辺には、多数の遺跡がある。本遺跡が立地する台地は全面遺跡であるといっても過言ではない。本台地の北部を中心に、甲斐銚子塚古墳、大丸山古墳、天神山古墳といった前方後円墳、円墳の丸山塚古墳、前方後方墳の小平沢古墳、小円墳のカンカン塚古墳（茶塚）など、前期古墳が集中する。また、後期古墳も、銅鏡を出土した稻荷塚古墳や、博物館構内古墳などがある。本台上には、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての百基以上の方形周溝墓が発



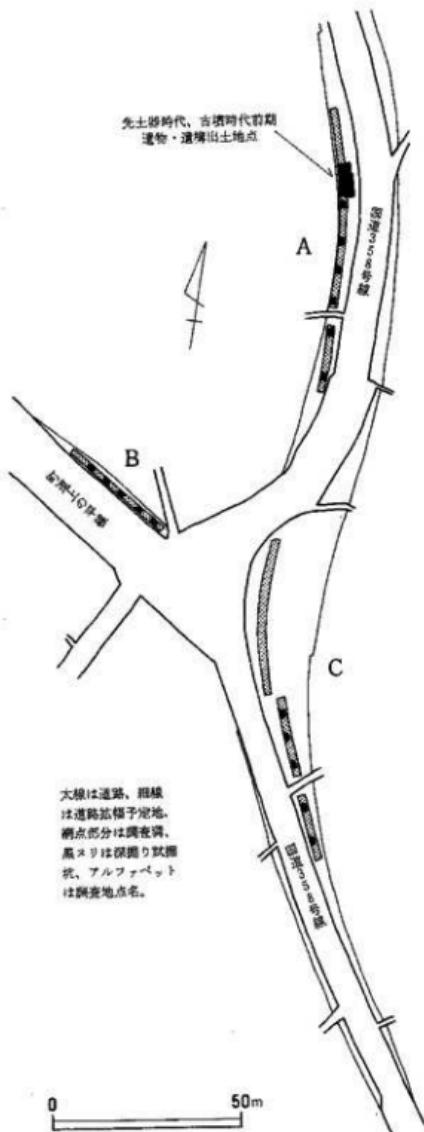
第2図 1989年調査地点位置図（2500分の1、アルファベットは地点名）

見された上の平遺跡をはじめ、東山北、東山南、宮ノ上、熊久保、馬乗窪、北原といった縄文時代から古墳時代にかけての遺物がみられる遺跡がある。先土器遺物も、上の平遺跡で、ナイフ形石器2点、石刃1点が採集されている。

このように本遺跡周辺は、先土器時代から古墳時代にかけての遺跡が集中する。特に、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、集落や方形周溝墓群、前期古墳が形成され、甲斐国の中⼼地的な様相を呈する。今回の調査で得られた古墳時代前期の遺物も、こうした集落の広がりを知る上で重要である。

3. 調査経過と調査方法

本遺跡の東部を国道358号線が横切っているが、その拡幅および道路改良、風土記の丘への

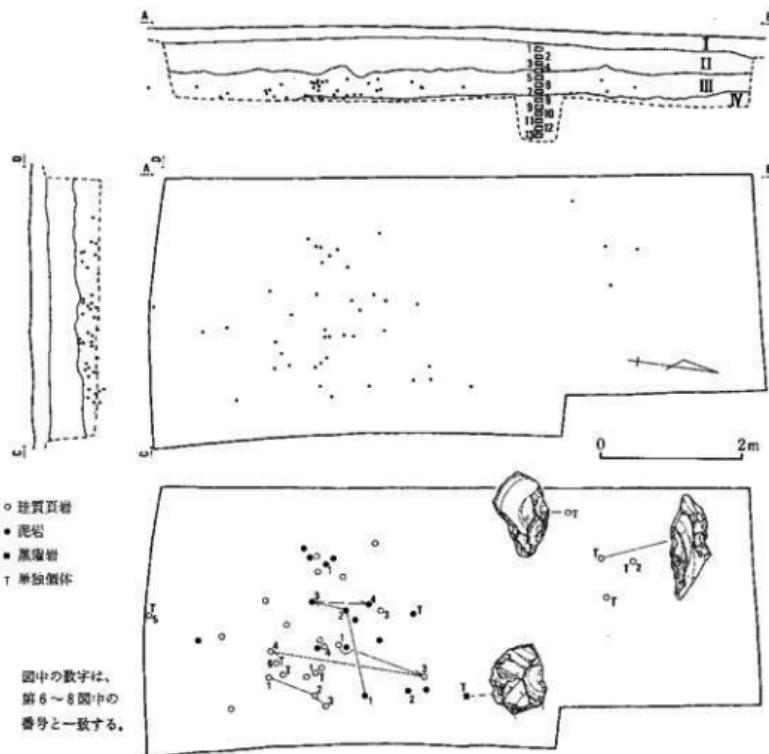


第3図 調査溝位置図

進入路である町道上の平線の道路改良が1988年度に、県道路建設課で計画され、その旨県文化課に連絡があった。そこで、その工事にかかる部分において、遺構・遺物の有無の確認のための試掘調査を行うこととなった。

調査は、1988年度の事業として、1989年1月30日から同年2月8日まで行なった。工事予定地は、第3図のように幅2~15mと細長い。これを3地点に分けて調査した。A地点では、国道西側の拡幅部に幅2m長さ75mにわたって調査溝を設定した。国道東側は、地形の傾斜地であったり、削平されてしまった所ばかりであったので調査溝を設定しなかった。また、調査溝の北側は傾斜地となり、急に落ち込んでいる。南側は幅が狭く、調査溝の設定ができなかった。調査溝東側は擁壁である。B地点は、幅2m長さ30mの調査溝を設定し、ほぼ全体を調査した。C地点では、かなり広い面積が取られているが、この部分は傾斜地のうえ、かつて埋土がなされていた。より平坦な部分に、幅2m長さ85mにわたって調査溝を設定した。

調査法は、まず重機で表土を除去した後に、ジョレンで遺構精査を行った。その後、先土器遺物の確認のため、10~5m間隔で、1.5m×2m、深さ約1mの試掘坑を17ヵ所設定した。そのうち、A地点で先土器時代遺物が出土したので、8m×4m、深さ1.5mまで拡張し調査した。



第4図 先土器時代遺物出土状況図

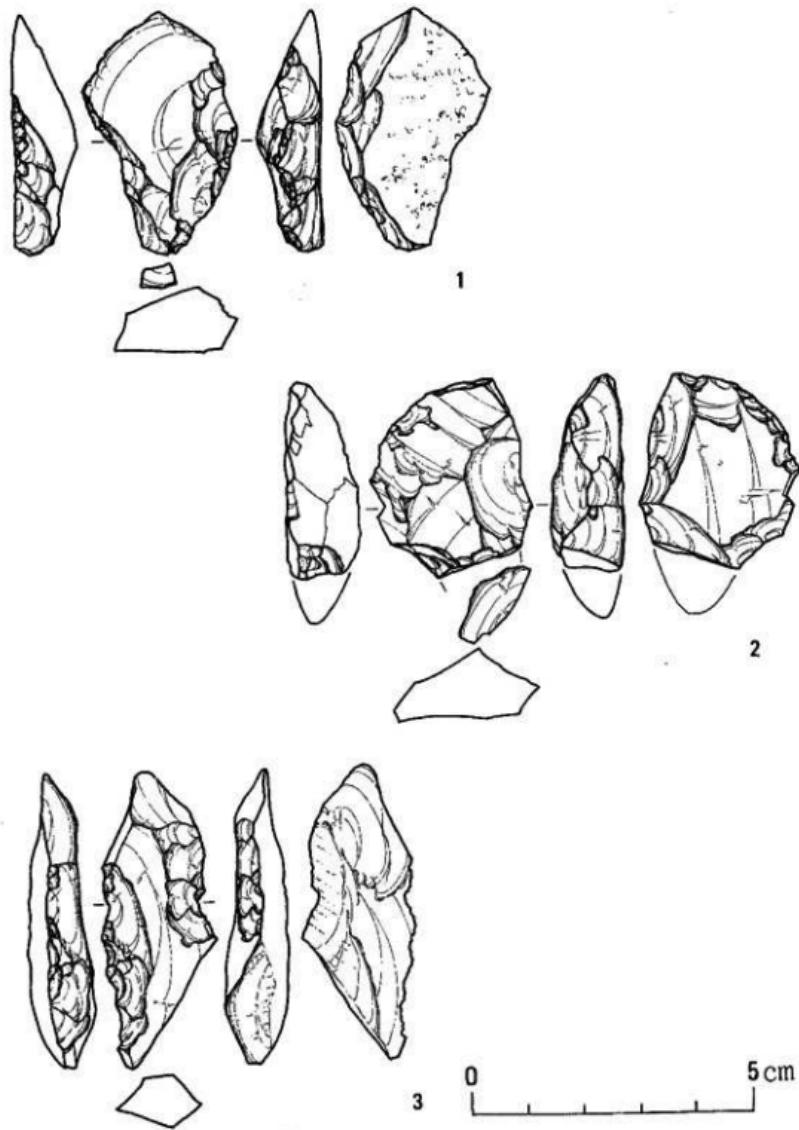
4. 先土器時代の遺物

今回の調査で出土した先土器時代の石器や剝片等は、合計48点である。このうち、4点は、耕土中より表採されたものである。内訳は、台形様石器2点、削器1点、石核2点、剝片20点、碎片13点である。

遺物の出土状況と層位 (第4図)

遺物は、調査区の北部と南部の2ヵ所にまとまって出土した。北ブロックと南ブロックと呼称する。北ブロックは数が少なく、4点である。南ブロックは、40点と数が多い。これらの石器や剝片等は、垂直分布をみると、上下差約50cmほどの範囲に集中し、北ブロック、南ブロックともほぼ同一レベルにあると思われる。

調査地点の層位は、上層よりI層耕作土層、II層黄褐色ソフトローム層、III層黒色帶、IV層



第5図 先土器時代石器(%)

暗褐色ハードローム層である。Ⅱ層の上方には、本来黒色土層が乗るはずであるが、ここでは耕作により消失している。また、その耕作の深度は、ソフトローム層上部にまで及んでいるらしい。Ⅲ層は、非常に軟質で、Ⅳ層に較べて明るい色調である。Ⅲ層は、ハードローム層と同様に硬質である。上部にソフトローム層が波状に入り込み、下部には暗褐色ハードローム層がマダラ状に入る。黒色帶といつても、黒色ハードロームのブロックが帯状に集塊したような状況である。

遺物は、Ⅲ層の黒色帶の下半部に集中している。ソフトローム層やハードローム層中から出土したものはない。

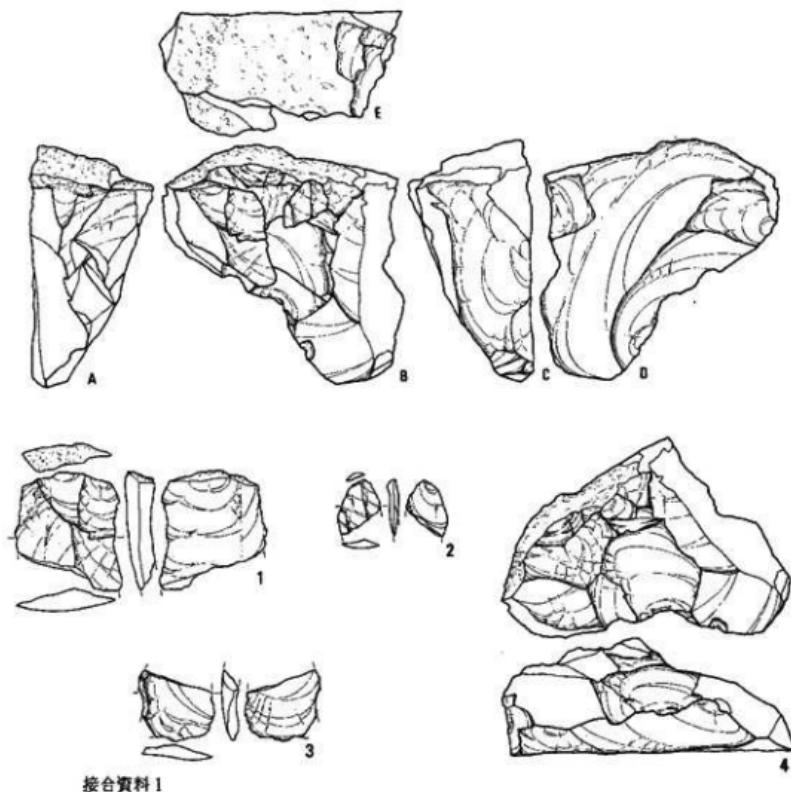
なお、ATは、Ⅲ層黒色帶上部から、Ⅱ層黄褐色ソフトローム層下部にかけて、その検出量のピークがある（河西論文参照）。したがって、本石器群は、AT降灰より古い時期のものである。

石 器（第5図）

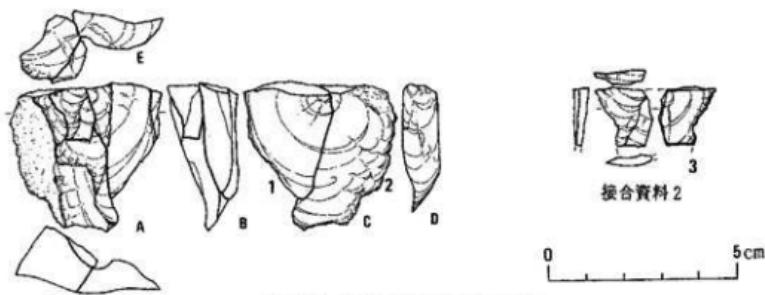
1は、珪質頁岩製のいわゆる台形様石器である。厚手の横長剝片を素材とする。素材右縁のやや尖った刃縁を先端とし、全体の形状は、切出ナイフ状である。右縁側に打面を置き、交互剝離による粗い調整によって打面を除去している。その後、若干の細かな調整を行っている。この剝離によって形成された右縁部は、平面が弧状で、側面は波状をなす。なお、右縁部の調整は、先端端から行っておらず、約1cmほどの素材刃縁が残されている。左縁部は、素材背面からの急斜な剝離によって抉り込むように調整されている。先端側にやや細かな調整がなされている。左縁の先端側には大きく素材刃縁が残されている。また、基部端には、素材の折れ面とおぼしき剝離面が残されている。背面には、広く自然面が残るが、素材時の剝離面も石器先端側に2枚残存する。

2は、黒曜石製の台形様石器である。厚手の横長剝片を素材とする。素材背面には、素材時の多方向からの剝離面が残存する。素材左縁を先端側に置いている。素材打面を石器右縁側に置き、非常に粗い交互剝離で打面を除去している。右縁全体が調整されており、平面がゆるやかな弧状、側面が波状をなす。左縁部の先端側には、浅い調整が両面になされ、弧状の縁部が作られている。左縁基部には、抉り込むような調整がなされている。両面になされており、素材主剝離面側が平坦な調整、素材背面側がやや急斜な剝離である。なお、基部端には折れ面が残るが、これは左縁基部の剝離より新しい、石器調整中の折れらしい。折れの後に、右縁基部の調整剝離がなされている。また、左縁先端側の剝離は、右縁の調整より古いものがある。こうした剝離の状況から、1同様に切出ナイフ状の形態が意図されていたものと考えられる。

3は、珪質頁岩製の鋸齒縁状の削器である。非常に細長い横長剝片を素材とする。素材の打面側と末端部側に、主剝離面から粗い調整を行い、鋸齒状の縁部を形成している。調整は広範囲であるが、両縁部とも、両端部を未調整のまま残しておらず、素材刃部が若干残されている。素材背面には、素材と同方向と逆方向の剝離が残されている。また、両端部に、折れ面が残存する。



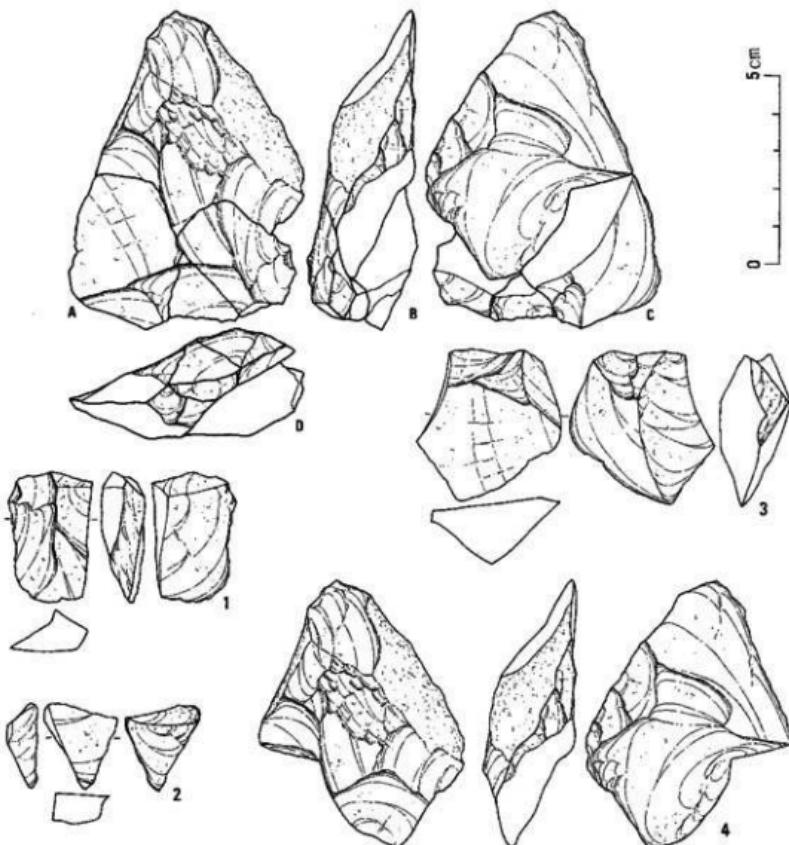
接合資料 1



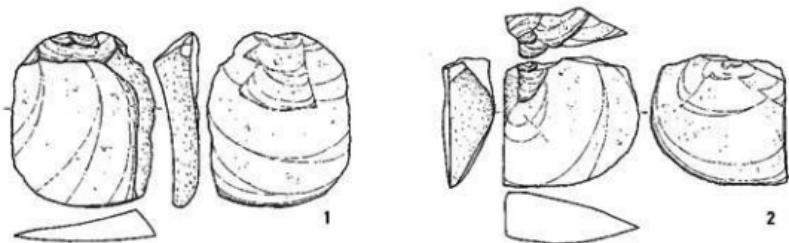
接合資料 2

0 5 cm

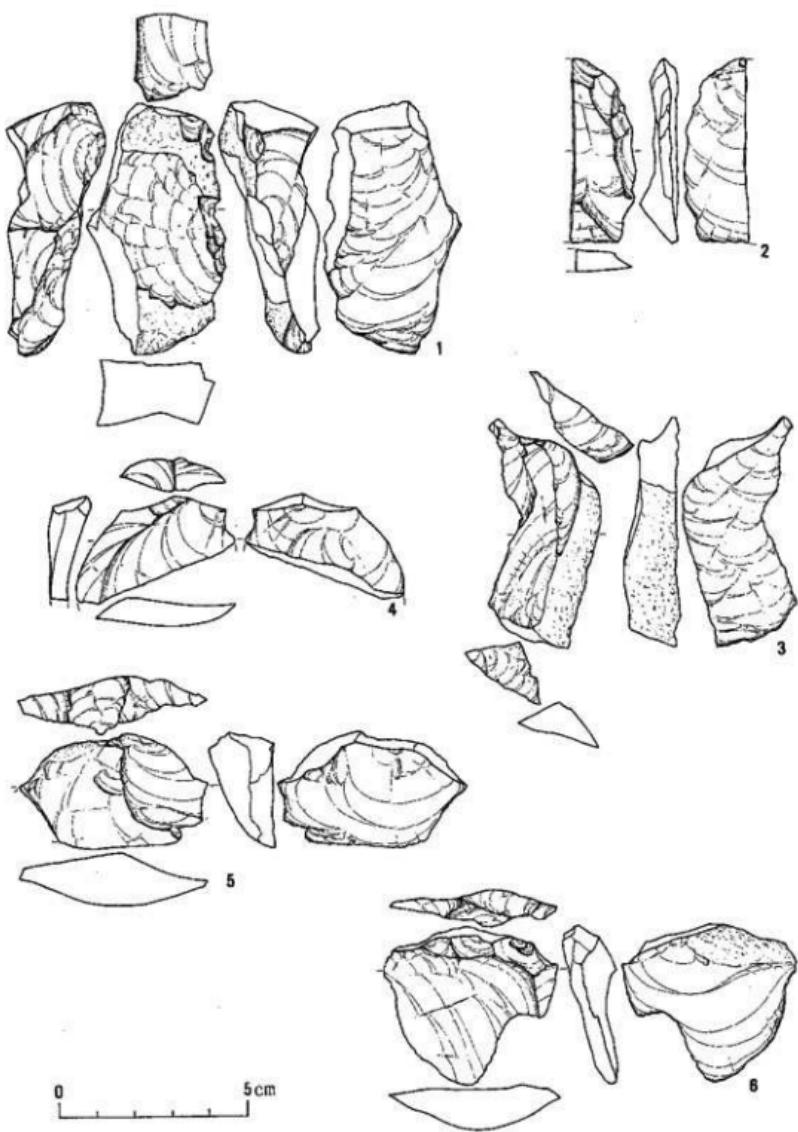
第6図 珪質頁岩接合資料 (3)



接合資料 3



第7図 泥岩接合資料と剥片（下段）(3/4)



第8図 珪質頁岩剝片(%)

接合資料と剥方剥離技術（第6～9図）

ここでは、主に接合資料の観察を行い、剥片剥離技術を復原したい。なお、その際の補助材料として、主な剥片の剥離面の状況もみてみたい。

接合資料1（第6～9図） 硅質頁岩の接合資料で、大型剥片を利用したものである。剥片2点、碎片1点、石核1点の4点で構成される。まず、大型剥片剥離以前の剥離がある（第9図工程1）。第6図AとB右下端部にみられ、方向は一定しない。Dの主剥離面の剥離（工程2）後、石核上面の節理面を打面とした剥離や、節理面の側方から平坦に剥離が行われる（工程3）。これらについては、大型剥片剥離以前の可能性もあるが、剥離の規模が比較的小さったり、その範囲が素材に限定されているように見えるので、ここでは大型剥片剥離後と考えた。この段階で剥離された剥片は縦長のものが主と思われ、打面線の角度が90度近い鈍角るのが特徴である。この工程の剥離作業の打点は、節理面の素材背面側縫部のはば全体に設定され、素材背面のはば全体を覆うように行われた。大小さまざまの大きさの剥片が得られている。この工程で、第6図接合資料1の1の剥片や2の碎片が剥離されている。順序は、1の後2であるが、この間に何枚かの剥離が行われている。剥離が進むにしたがい、剥離が小規模になっていく。2を含む最終的な小剥離は、十分な剥離角が取れないための失敗剥離であろう。

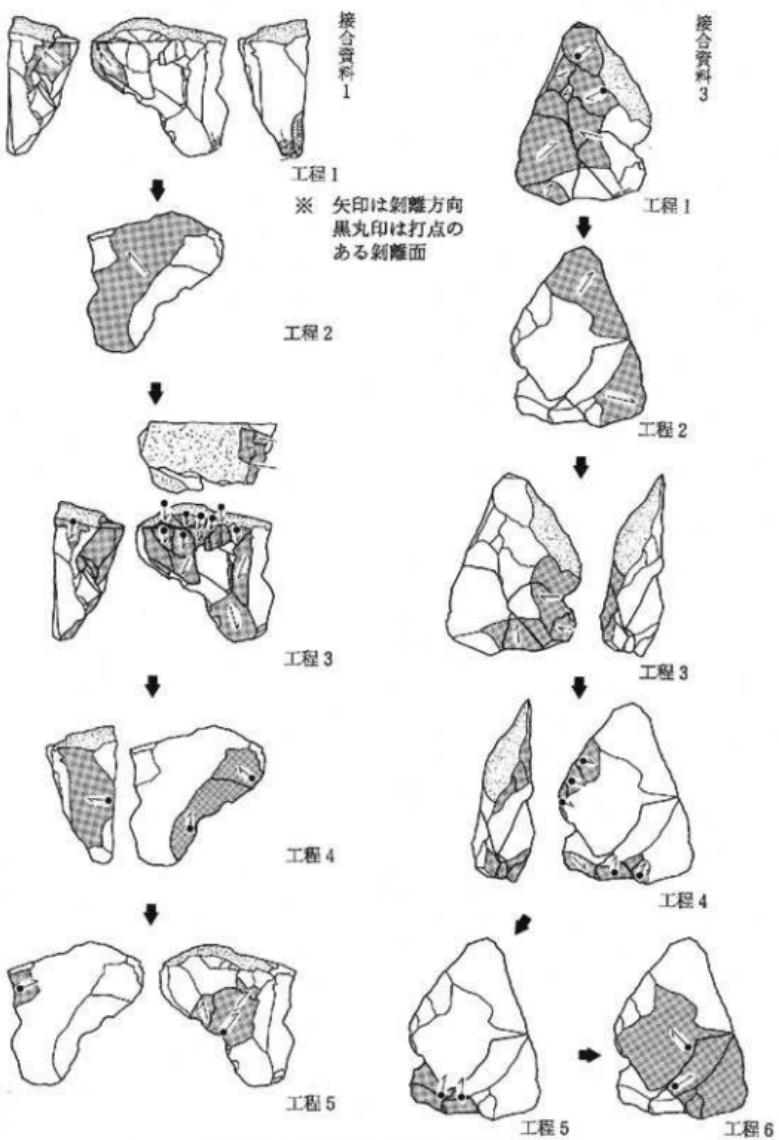
次に、素材背面や素材主剥離面を打面として横長の剥片が剥離される（工程4）。さらにその剥離面を打面として、やや小型の寸ずまりの剥片が剥離される（工程5）。この工程で3が剥離される。工程3が、角柱の角のような比較的鈍角の縫部を剥離するのに対し、工程4・5は、素材剥片の比較的鋭い縫部を剥離している。このように、本接合資料は、2つの剥離技術が同居していると言える。

接合資料2（第6図下段） 剥片剥離と同時に分断された剥片と、碎片の接合例である。剥片2点と碎片1点から構成される。硅質頁岩製。本剥片剥離以前に、同一方向の剥離が3枚みられ、しかも打点が直線的に後退している。左縫に自然面を大きく残す。打面は一枚のネガティブな剥離面である。剥離角は比較的小さい。

接合資料3（第7・9図） 泥岩の大型剥片を石核素材とした接合資料である。まず、素材剥片剥離以前の剥離が多方向からなされている（第9図工程1）。大規模な剥離がみられ、本剥片同様の大型剥片が剥離されたものと思われる。次いで、素材剥片が剥離される（工程2）。

剥片剥離作業は、まず素材主剥離面を打面とし、素材打面部付近で行われる（工程3）。次いで、素材背面を打面として剥離作業がなされる（工程4）。工程3同様、素材打面部付近で剥離作業がなされるが、工程3よりも広範囲である。次いで、再び素材主剥離面を打面に、第7図接合資料の3の1、2が剥離される（工程5）。2、3の接合面は節理面であり、1枚の剥片が分断した可能性もある。その後、素材背面を打面として最終的な剥離がなされる（工程6）。この工程に3の剥離がなされる。3の剥離は、背面を打面にしながら、主剥離面側に回り込むことはなく、背面側を大きく剥ぎ取る剥離である。その面を打面として、4の石核の最終的な剥離がなされる。

このように、この接合資料から復原される剥離技術は、剥離作業面と打面とを交互に入れ換



第9図 接合資料剝片剥離作業工程図

えて横長剝片を剥離するものである。

剝片（第7図下段、第8図） 剥片には、縦長のものと、横長のものがある。縦長のものは、厚手のもの（第8図1・3）と薄手のもの（第7図下段1、第8図2）がある。厚手のものは、剥離の状況をみると、打面を90度転移しながら剝片剥離を行なうような技術がみられる。一方、薄手のものは、背面に多方向からの剥離がみられ、後述する横長剝片と同様な剥離技術と思われる。

横長剝片（第7図下段2、第8図4～6）は、打面が非常に広く、全周の半分近くを占めるものがある。また、打面には、複数枚の剥離面がみられ、背面からみた形状が弧状である。背面には、打面方向からの剥離もみられるが、まったくこれとは違う方向からの大規模な剥離がみられる。これらの剥片は接合資料3同様に、打面と剥離作業面を交互に入れ換える剥離技術で剥離されたものと思われる。第7図2や第8図4・5には、背面にポジティブな面がみられ、大型剝片を用いた石核から剥離されたものと思われる。また、これらの横長剝片の打面や背面の剥離面の大半は、交互に入れ換った剥離作業の名残りと考えられる。縦長剝片のうち、第7図下段1や第8図2は、これと同様な剥離技術で得られたものであろう。

以上の観察から、次の2つの剥片剥離技術が復原できる。

剝片剥離技術A；打面縁の角度が90度近い鈍角の石核素材を用い、打面が自然面や節理面ないしは大きな剥離面である。打面を個定し、同一方向へ多くの剝片を剥離するもの（接合資料1の工程3）、打点を直線的に後退させるもの（接合資料2）、打面を次々に90度転移させるもの（第8図1・3）がみられる。この剥離技術では、縦長剝片と横長剝片の両者が得られている。

剝片剥離技術B；打面縁の角度が鋭角のもので、打面と剥離作業面とが交互に入れ換るもの。石核素材に大型剝片を用い、その打面部やその周辺の縁部で、素材剝片の背面や主剥離面を広く剥ぎ取るように剥離作業がなされる。接合資料1の工程4・5や接合資料3、第7図1・2や第8図2・4～6の剥片がこれにあたる。主に横長剝片が得られている。

なお、剝片剥離技術Bには、石核素材として、大型の剝片を用いており、剝片剥離技術Aについても、その可能性を否定できない。したがって、その剥離技術が存在するはずであるが、今回の資料からは具体的に論議できない。

石 材

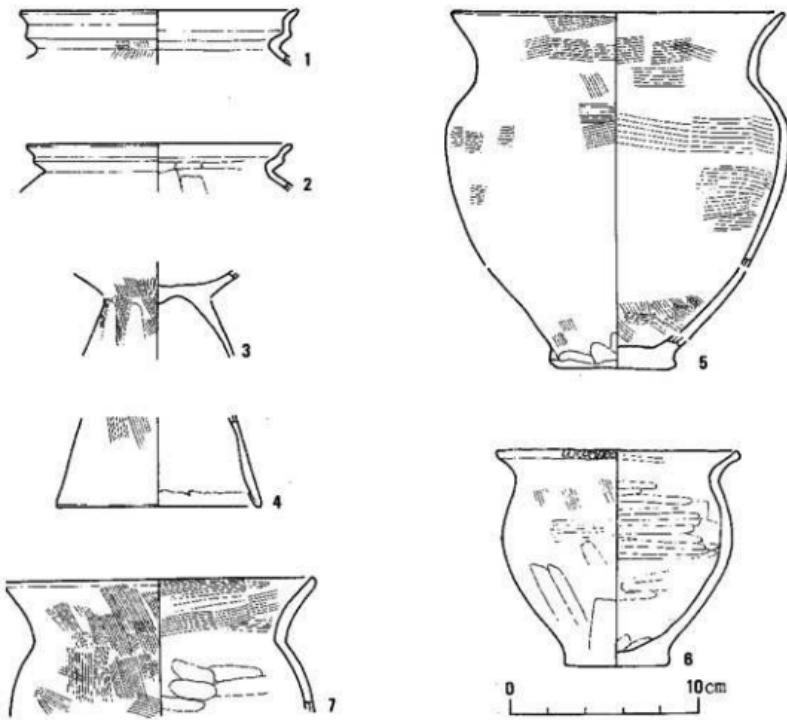
3種類がみられる。珪質頁岩が最も多く、28点である。青みがかった白灰色から青灰色のものが多く、白色のスジが縦横に無数に入る。節理がかなり入っており、節理面で割れた剝片が多い。単独個体8点を含め、14個体に分類できる。なお、第5図3の削器のみ濃緑色の色調である。次に多いのが、泥岩で、19点ある。表面が黄白色に風化しており、皮をかぶったように剥離する。これが取れた部分は、黒みを帯びた、あばた状の表面となる。新しい破断面は黒色である。この泥岩は、ややホルンフェルス化している。個体分類が困難な石材である。1点だけ、黒曜石がある。第5図2の台形様石器である。黒色のスジが無数に入る不透明なもので、若干の挟雜物が入る。産地分析をしていないが、外面状の特徴から、信州産のものと考えている。

石器分布（第4図）

石器や剝片等は、南北2つのブロックに分かれて分布する。北ブロックは、4点と少ないが、台形様石器と削器各1点を保有する。全て珪質頁岩で、残りの2点の剝片を含め、同一個体のない単独資料ばかりである。南ブロックでは、黒曜石製の台形様石器1点を保有するが、ブロック北縁部に位置している。珪質頁岩、泥岩ともに混在するが、珪質頁岩はより南部に、泥岩はより北部に多く分布するようである。

本石器群の位置付け

今回の調査で確認できた立石遺跡の石器群の特徴は、台形様石器と鋸齒級の削器の石器組成を持つ点、剝片剥離技術が2種類あり、石核素材の打面線の角度が90度近い鈍角で打面を個定したり、次々と90度転移させるものと、打面線の角度が鋭角で打面と剥離作業面を交互に入り換えるものがみられる点、ATより下位から出土した点などである。本石器群と同様の特徴を持つ石器群は、県内では見られない。ATより下位から検出された石器群としては、都留市の一杯窪遺跡があるが、石刃に近い綫長剝片を主体とした石器群らしく、本遺跡のものとは異なる。



第10図 古墳時代前期土器

A Tより下位の石器群については、近年特に研究が進んでおり、最近の論文の中で本遺跡の位置付けについて触れたものもある。奥村吉信氏⁽⁴⁾は、後期旧石器前半の石器群を剥片剝離技術、二次加工技術、石器組成の三要素から七群に整理している。その中で、立石遺跡の石器群を秋田県地蔵田B遺跡石器群の一群としている。基部両側縁に平担剝離とインバース・リタッヂの併用されたペン先形ナイフ石器が主体を占め、他に鋸歯縁石器や石斧などがある。剝片剝離技術は平担打面で打面と作業面を交互に入れ換える技術と、頻繁に90度の打面転移がなされるものが存在する。この石器群の中には、東京都の下里本色遺跡第K層や千葉県中山新田I遺跡VI層が加えられており、この石器群が武藏野台地のK層相当の古さのものであるとみることができる。

また、佐藤宏之氏⁽⁵⁾は、A T以前の石器群については、少なくとも4段階あるとし、日本列島の後期旧石器時代前半期の編年試案表の中で、立石遺跡を関東地方編年のK層段階に位置付けた。なお、この表の中で、一杯窪遺跡の石器群をVII層段階とし、立石遺跡よりも新しく位置付けている。

このような見解に対して、私見を述べる用意はないが、台形様石器を主体とする石器群が、A T以前の石器群の中でも、より古い段階に位置付けられる点は、いくつかの文献で論じられている状況がある⁽⁶⁾。立石遺跡の石器群が黒色帶の下半部から出土している点も考え合わせ、武藏野台地のK層段階に位置付けるのは、異論のない所であろう。

5. 古墳時代前期の遺構・遺物

先土器時代遺物の出土地点では、古墳時代前期の遺物も比較的まとまって出土した。本地点は、畑の耕作のため、ソフトローム層上面まで搅乱が及んでいたが、かろうじて、当時代の住居址に伴う炉址と思われる焼土が直径30cmの範囲でみられた。周辺は、部分的に深く搅乱されており、その近くで焼土面より20cmほど深い位置から、土器群が出土した。搅乱坑より出土した土器を中心にして第10図に示した。1～4は、S字状口縁台付甕である。5、7は甕形土器である。内外面はハケメ調整がなされ、外面ではその上をミガキ調整されている。6は、小型甕形土器である。口縁部にキザミメがみられ、内外面にヘラ状工具による調整がみられる。これらは、焼土周辺の搅乱坑や耕作土中から出土しており、一括遺物を見てよいだろう。

6. おわりに

今回の調査の成果は、まず、A Tより下位より台形様石器を含む石器群を得たことである。A Tより下位の石器群は県内では、一杯窪遺跡に次いで2例目であるが、先に述べたとおり佐藤宏之氏の見解が正しいとすれば、立石遺跡の石器群は県下最古ということになる。また、立石遺跡の1980年の調査でも先土器時代遺物が得られており、これもA Tより下位の可能性もある。一杯窪も含め、正式報告が待たれる所である。

古墳時代前期の遺物については、立石遺跡と同期の集落址の広がりを示すものとして重要である。本台地前面には、古墳や方・円形周溝墓などの墳墓群が、その南側には、大規模な集落群か形成されていたものと思われる。

最後に本遺跡の A T 検出や石材鑑定を行っていただいた帝京大学山梨文化研究所の河西学氏に衷心より御礼申し上げる次第である。

註

1. 小林和一・上杉陽・里村晃一 1982 「桂川支流菅野川流域で発見された旧石器とその火山灰層序」『日本第四紀学会講演要旨集』12 日本第四紀学会
2. 山梨県企画管理局 1984 『土地分類基本調査—甲府—』
3. 6面に分類されている。沢 洋 1981 「甲府盆地西縁・南縁の活断層」『地理学評論』54
4. 奥村吉信 1989 「後期旧石器時代前半石器群の技術基盤の諸様相」『考古学ジャーナル』No309 ニュー・サイエンス社
5. 佐藤宏之 1989 「後期旧石器時代前半期の研究」『考古学ジャーナル』No309 ニュー・サイエンス社
6. たとえば、須藤隆司 1986 「群馬県藪塚遺跡の石器文化」『明治大学考古学博物館情報』No.2 の岩宿段階の石器群、佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』第73巻第3号など。

立石遺跡での先土器遺物を包含する地層

河西 学

(帝京大学山梨文化財研究所)

1. はじめに

2. 分析法

3. 各遺跡の鉱物組成とテフラ

4. 立石遺跡の石器出土層位と A T

1. はじめに

立石遺跡は、甲府盆地南東縁に広がる曾根丘陵上に位置している。

曾根丘陵の命名は田中(1925)によるとされている(笠井、1952)。曾根丘陵を構成する地質は曾根層群と呼ばれ、下位から高部層、寺尾礫層、黒富士火砕流堆積物、局所的な佐久シルト層、八ヶ岳の崩壊による蘿崎岩屑流堆積物、さらに上位に扇状地性砂礫層(原礫層)が堆積している(内藤、1988)。原礫層は、上部は風化し古土壌となっていて、その上位に褐鉄鉱の薄層を挟んで御岳第1軽石($Pm-1$; 小林ほか、1967)を不整合にのせ、さらに厚さ2~3mの褐色風化火山灰層の堆積がみられる。曾根丘陵に分布する風化火山灰層については宮沢(1964)・藤本(1975)の報告がある。

宮沢(1964)は、曾根丘陵に分布する褐色風化火山灰層を曾根ローム層と、また曾根ローム層最下部に約30~90cmの厚さで堆積する黄褐色輕石層を豊富バミス層と呼び、豊富村一の沢での重鉱物分析から信州ローム層中の約8万年前に降灰した御岳第1軽石 $Pm-1$ に対比した。御岳第1軽石 $Pm-1$ はその後小林ほか(1967)によって、東方に分布軸をもち関東地域にまで追跡される広域テフラであることが示された。

藤本(1975)は、中道町の曾根丘陵を冲積面・平面・善藤面・東山面・米倉面に地形面区分し、ローム層が善藤面以上の面に分布することを示した。また上野原遺跡および上向山の露頭において褐色風化火山灰層の重鉱物分析を行ない、 $Pm-1$ の重鉱物組成が褐色風化火山灰のそれとは異なり甲府盆地内で広く対比されることを確認した。しかし $Pm-1$ 以外の風化火山灰の起源についての言及はなされていない。

沢(1981)は、曾根丘陵の地形面を上位よりIa・Ib・II・IIIa・IIIb・IV面に分類した。それによるとIa面の坊ヶ峰、Ib面の米倉山・王塚・東山などは蘿崎岩屑流堆積物を含む曾根層群により構成されているので30万年前後、II面は $Pm-1$ に不整合でおおわれることから10万年前以前、IV面は火山灰におおわれていないので2万年前以降にそれぞれ形成されたとした。

平川(1982)は、中央自動車道路笛吹サービスエリア地点での露頭の観察から、蘿崎岩屑流の流下以降活発化したおそらく逆断層運動に伴う引きずり込みに起因して曾根丘陵の背斜部(テクトニック・バルジ)が形成されているとした。

町田・新井(1976)は、九州始良カルデラから約2.1~2.2万年前に噴出した始良Tn火山灰

(AT)が全国をおおう広域テフラであることを発見した。ATの発見は考古学の分野特に旧石器遺物の編年に大きく貢献した。

山梨県でも都留市一杯窪遺跡においてATとその下位から石器の発見が報告されている(小林ほか、1982)。山梨県南東部の富士山周辺地域から南関東にかけての地域では、主として富士火山および古くは箱根火山を給源として厚いテフラ層が堆積しており、火山灰層序学が急速に発展していた(たとえば町田、1964; 上杉ほか、1980)。

これに対し甲府盆地は富士火山の北西に位置するため、富士テフラの分布域に入るのは曾根丘陵などの甲府盆地南東縁の一部の地域に限られる。富士テフラの分布の縁辺部であることからテフラ降灰量が少なく、また富士火山以外のテフラの降灰も御岳火山の活動休止以降ほとんどないことから褐色風化火山灰層の堆積が薄い。

甲府盆地での先土器時代の遺物の出土は、中道町米倉山、下向山、立石、上の平、後呂、豊富村弥二郎、横畠など曾根丘陵上の各遺跡、一宮町笠木地蔵遺跡、一宮・勝沼町駅廻堂遺跡群塙越北地区、市川大門町宮の前遺跡、市之瀬台地六科丘遺跡、赤坂台地双葉2号墳、牧丘台地込山遺跡などに知られている(保坂ほか、1986)。しかし出土遺物をテフロクロノロジー(火山灰編年学)を用いて編年するという試みはこれまでほとんどされていなかった。しかし最近いくつかの地点での発掘調査において、AT層準の確認がなされてきた。(河西、1987a・b)。

今回、上の平遺跡に近接する立石遺跡において甲府精進湖線の道路拡幅工事に伴う発掘調査が行なわれた。これらの遺跡は沢(1981)の1b面上に位置している。この発掘調査で先土器時代の石器群が褐色風化火山灰中に黒色帯を中心とする層準から多く出土することが明らかになった。石器群は台形様石器や鋸歯縫をもつ削器などが含まれる。これらの石器群とテフラの関係を知るためにテフラ分析を行なった。ここでは従来の上野原・上の平遺跡の分析結果もふくめて以下に報告する。

2. 分析法

湿ったままの試料約20gを秤量したあと、水を加え、超音波装置を用いて試料の分散をはかり、分析筒(ヰ250)で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析筒(ヰ60、ヰ250)を用いて、>1/4mm、および1/4~1/16mmの粒径に階別・秤量し粒径組成を算出した。なお分析に用いた試料の乾燥重量は、別に同一試料約5~10gを秤量ビンにとって秤量後、乾燥器で105°C、5時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は、1/4~1/16mmの粒径砂をスライドグラスに封入し、偏光顕微鏡下でおこない、1試料ごとに、例外を除き、火山ガラス・重鉱物・軽鉱物の合計が300粒以上、また風化物やその他の粒子含めた合計が500粒以上になるよう計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木(1980)にしたがい、細粒鉱物粒子を多く包有するF型ガラスはF'型として区別した。始良Tn火山灰ATのバブルウェール型火山ガラス(町田・新井、1976)は、遠藤・鈴木(1980)のA・A'型に、また吉川(1976)の扁平型(Ha・Hb)に相当する。火山ガラスの屈折率の測定は、新井(1972)の方法に従った。

ただし、上野原遺跡・上の平遺跡では、1/4~1/16mm粒径砂を秤量後、テトラブロモエタン(比重約2.96)を用いて重・軽鉱物を比重分離し、秤量後プレパラートに封じ、偏光顕微鏡下で検鏡した。重鉱物組成は重鉱物総数を基数とし、軽鉱物組成は風化粒子等を除いた火山ガラス・石英・長石・雲母の総数を基数にして各鉱物の産出割合を算出し粒数%で表示した。

したがって、上野原・上の平遺跡における火山ガラスの表現方法と立石遺跡のそれとは算出方法が異なるため、比較の際注意が必要である。

3. 各遺跡の鉱物組成とテフラ

以下に各遺跡の分析結果について述べる。

(1) 上野原遺跡

本遺跡B区西端で採取されたPm-1より上位の風化火山灰試料24点である(第1図)。

砂分構成では、上方に向って重鉱物量の漸減と軽鉱物量の漸増傾向がみられる。

N~II層では、A・A'型(いわゆるバブルウォール型)の無色火山ガラスが合わせて30~50%台の出現率を示す。火山ガラスの屈折率はNaliiにおいて、1.497~1.501(主要レンジ1.499~1.500)の値が得られた。火山ガラスの含有量の変化から見てATの降灰層準はIV層最上部からIII層下部付近と推定される。

重鉱物組成ではカンラン石が優占する。カンラン石は、VI~VII層において60%台の高率を示し、II層最下部を境に上方に向って漸減し40~50%台となる。このカンラン石の変化曲線は、砂分中の重鉱物量変化と類似性がみられる。今回の分析でカンラン石が優占することから、地表下約1.2mの火山灰層は、カンラン石を多量に含む玄武岩質の富士テフラに由来する可能性が極めて高い。これは風化火山灰層中に黒色・褐色スコリア片が含まれることも一致する。なお、斜方輝石・单斜輝石・斜長石等の一部も富士火山起源の鉱物である可能性が強い。

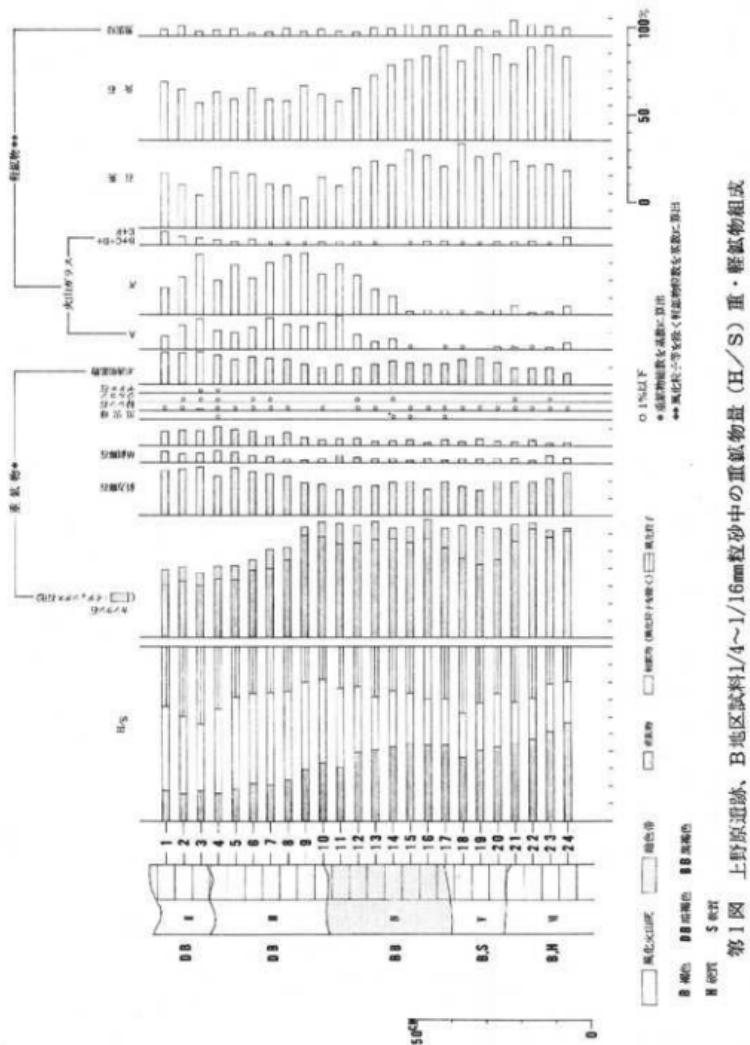
AT層準、カンラン石の変化傾向、および暗色帶の存在は、富士火山東方の武藏野台地立川ローム層中の分析結果と極めて高い類似性を示している(遠藤・鈴木、1980; 羽鳥ほか、1983; 東京天文台構内遺跡調査団、1983)。従って曾根丘陵で広く追跡できる暗色帶(本遺跡VII層)は、立川ローム層第2暗色帶(BB II)に対比されると考えられる。

V層は、軽鉱物風化粒子やインディングス石化したカンラン石がやや多く出現していることから他に比してやや風化が進んでいる可能性がある。

石英・角閃石・黒雲母等の一部は、後背地から運搬されてきた二次的堆積物に由来する鉱物と考えられる。またII層上部~I層に含まれるA・A'型火山ガラスも、二次堆積あるいは上下方向の搅乱作用によってもたらされた可能性がある。

(2) 上の平遺跡

本遺跡は、立石遺跡に近接して東山の山頂部に位置する。ナイフ形石器2点・剝片1点などの先史器遺物が出土しているが、縄文時代の遺構中の搅乱された堆積物中からあるいは表面採



取によって得られたものである。

分析試料はK※グリット西壁から採取したPm-1およびその上位の褐色風化火山灰試料29点である(第2図)。

1/4~1/16mmの砂分中の重鉱物量は、重鉱物組成中のカンラン石の割合と相關的な変化を示す。Pm-1(K層)は、角閃石・不透明鉱物が多く、かつジルコンが産出することで特徴づけられる。小林ほか(1967)は、駒ヶ根東中学において厚さ約3mにおよぶPm-1の重鉱物組成を示している。それによるとPm-1最上部付近で、不透明鉱物が減少し、斜方輝石・单斜輝石が増加する傾向がみられる。本遺跡のNo.26~27においても同様の傾向がみられる。

No.5~1においてバブルウォール型のA・A'型火山ガラスが多産する。火山ガラス屈折率の測定値は、No.5で1.498~1.501(モード1.500)、No.3で1.497~1.501(モード1.4995)であった。従ってこれらの火山ガラスの濃集は、形態・屈折率および層位から始良Tn火山灰ATに同定される。火山灰層の軟質化が本地点の場合I・II層ばかりでなくIII層にまで及んでいることからNo.4~5の火山ガラスは二次的混入の可能性もある。ATの降灰層準は、バブルウォール型火山ガラスの最大含有率を示すNo.3付近を中心としたII層最上部からI層最下部にかけてと考えられる。

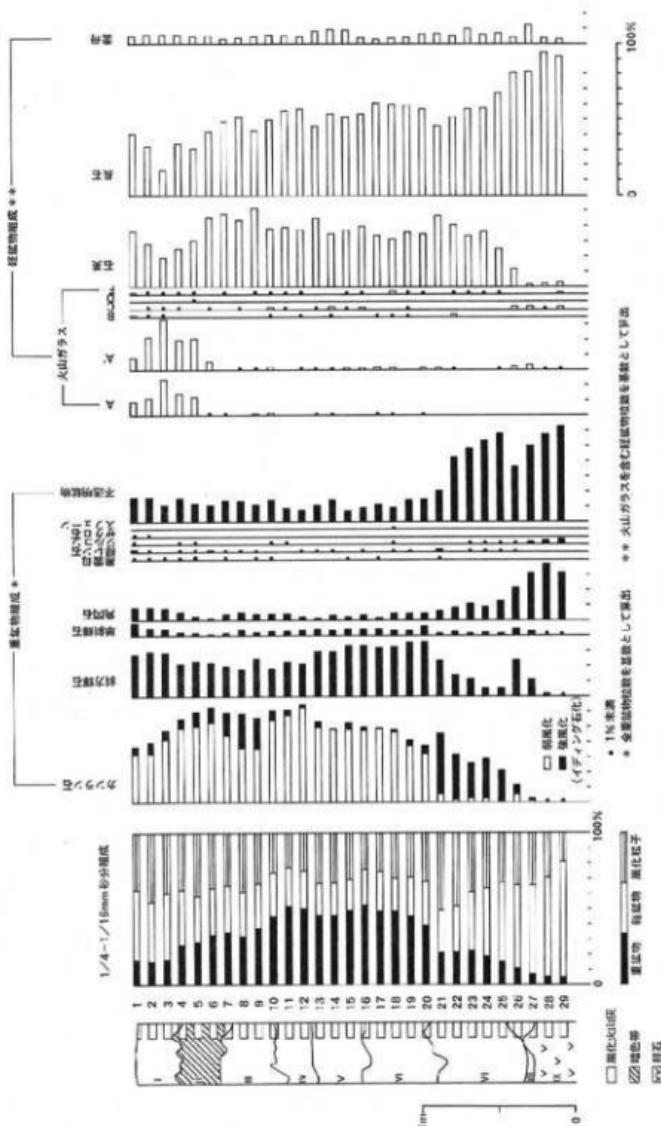
富士火山のテフラは一般にカンラン石を多く含む玄武岩質テフラで特徴づけられ、安山岩質~流紋岩質の木曾御岳火山あるいは両輝石安山岩の箱根火山のテフラとは区別される。富士火山の活動は下末吉ローム層上部の堆積期までさかのぼるとされ、関東地域において下末吉一ム層上部から上位でカンラン石の出現が從来から報告されている(関東ローム研究グループ、1965; 町田洋ほか、1968; 町田瑞男、1973)。上の平遺跡の分析結果は、重鉱物組成においてPm-1直上からカンラン石が増加しIV~II層で高率を保ち、暗色帶から上方にむかってカンラン石が減少する傾向が顕著である。この傾向は從来の関東地域などからの報告とよく一致している。従って、富士の火山活動が活発化する約8万年以降、富士火山から北北西約30kmに位置する曾根丘陵にも富士テフラの降灰が連続的に及んでいたと考えられる。

本遺跡の暗色帶II層においてカンラン石が減少はじめ、その直上付近にATの火山ガラス濃集層準がある。この関係は南関東の立川ローム層において一般的であることから、本遺跡II層の暗色帶は上野原遺跡III層暗色帶と同様立川ローム層第2暗色帶(BB II)に対比されると考えられる。

本遺跡VI層(No.25~21)、およびIII層(No.9~7)付近の2層準において、カンラン石のイディンス石化が進んでいる。特に前者ではカンラン石の大部分がイディンス石化しており、その上位のIV層とは風化程度ばかりではなく重・軽鉱物組成においてやや変化がみられる。本遺跡III層中のカンラン石風化は、上野原遺跡VI層のそれに対比される可能性が強い。

風化カンラン石については從来からいくつかの報告がなされているたとえば(羽鳥、1971; 羽鳥ほか、1983; 町田瑞男ほか、1983)。町田瑞男ほか(1983)は、カンラン石が完全にイディンス石化されているのはPm-1から東京軽石TP直下であると述べ、飯能市新町の立川縁層直上の砂質ローム層中において多量のイディンス石を報告している。上杉ほか(1983)

第2図 上の平遺跡K-13地点テフラ試料 1/4~1/16mm粒径砂分質物組成



は古期富士テフラ累層（OFT）上部のY103～113付近においてテフラの風化が激しいことを述べている。以上のことから本遺跡Ⅶ層はPm-1からTP直下の間の風化層準に、またⅢ層は立川疊層直上付近の風化層準にそれぞれ対比されると考えられる。TPの年代は約4.9万年とされていることからⅦ層の上限は約5万年前と推定される。なお、立川疊層の年代は約3万年前とされている（遠藤ほか、1983）。カンラン石の風化層準は疊層直下や水つきローム層中に多く見られるが、本遺跡Ⅲ層のように段丘面がゆるやかな背斜構造をなしている部分で疊層より少なくとも2m以上も上位の場合、地下水の影響は少ないものと考えられる。カンラン石の風化は気候的な要因と関連性をもって形成された可能性がある。

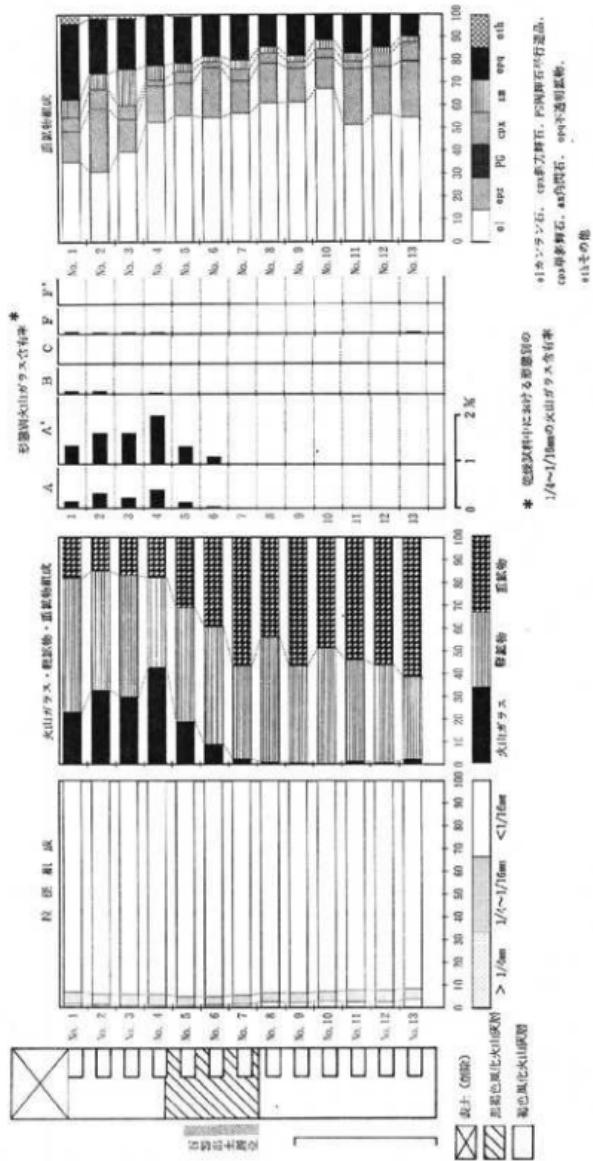
(3) 立石遺跡

試料は、A地点先土器時代調査溝の断面において第3図に示す層位で試料13点を採取した。1試料は、高さ5cm、幅10cm、奥行き5cmの直方体の部分から採取した。

分析結果を第1表、第3図に示す。第1表は計数した鉱物ごとの粒数を示す。第3図は、粒径組成、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成、形態別の火山ガラス含有率、および重鉱物組成を示す。なお、火山ガラス含有率は、試料単位重量あたりの1/4～1/16mm粒径の火山ガラスの割合で表示した（注1）。以下に各地点ごとの鉱物組成の特徴について述べる。

粒径組成は、どの試料も約90%を越える1/16mm以下のシルト・粘土粒子から構成されている。数%の1/4～1/16mm細粒砂と1～3%の1/4mm以上の砂を含む。これらの粒径組成は、風化作用によって分解したテフラ粒子が細粒化していることが予想され、テフラの降灰時の粒径組成をそのまま示すものではないと考えられる。粒径組成の層位による変化はあまり顕著ではない。しかし、傾向として下位の褐色風化火山灰層中のNo13～8では、1/4mm以上の粒子も2～4%と比較的多く、上方にむかって漸減傾向がみられる。黒色帶中のNo7～5では含有砂分(>1/4mm、1/4～1/16mm)の量は減少して数%の最低値をとる。その上位の軟質の褐色風化火山灰層は黒色帶より増加するが、増加の大部分は1/4～1/16mm粒径の細砂分であり、>1/4mmはほとんど1%前後の低率で変化しない。1/4～1/16粒径砂分中で風化粒子などを除く火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成をみると、火山ガラスの極大がNo4に明瞭に認められる。火山ガラスの割合は、黒色帶のNo6～5付近で火山ガラス含有率が漸増し、No4で約40%の極大に達している。その後上方に緩やかに漸減し、No1～3で20～30%台の値を示している。また軽鉱物は約40～60%で変化があり大きくなるのに対し、重鉱物は、下部の褐色風化火山灰層から黒色帶にかけてのNo17～7で約50～60%と高率であるが、黒色帶中で急減し、軟質風化火山灰層のNo4～1では約20%前後の低率で安定している。

火山ガラス含有量を形態別にみると、バブルウォール型であるA・A'型火山ガラスから大部分が構成されている。またA・A'型火山ガラスそれぞれの含有量もNo4において極大を示し、前述した火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成における火山ガラスの極大の位置と一致している。試料No4中に含まれる火山ガラスの屈折率を測定したところ、レンジ1.498～1.501（主要レンジ1.499～1.500）の値を得た。No4を中心とするバブルウォール型無色火山ガラスの



中道町立石井跡試料 粉怪網或、火山ガラス。軽鉛物。重鉛物組成。

濃集は、火山ガラスの形態、屈折率、および黑色帶直上に含有量の極大があることなどの層位関係から A T に同定される。重鉱物組成は、カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・不透明鉱物・角閃石などから主として構成される。カンラン石は、No.13~10で50%前後の値を示したのち、No.10で68%と部分的な急増がみられ、その後No.9~4において極めて緩やかな漸減傾向がみられ、No.4~2で急減して、No.2では31%の極小値をとて上方に増加傾向を示す。斜方輝石は10~20%台の値を、単斜輝石は10%未満の値をとる。ときに両輝石平行連晶か認められるが極めてまれである。角閃石は数%が一般的であるが、No.3において16%の含有率を示す。不透明鉱物は10~30%台の値をとり上方に漸増傾向を示す。

上野原遺跡・上の平遺跡ではカンラン石の含有率は、A T 直下の黑色帶で極大を示し、A T から上位にかけてカンラン石は漸減するが、これらの傾向はどの遺跡でも共通し、また南関東の立川ローム層第2暗色帶(BB II)の特徴とも一致することから本遺跡第Ⅲ層も第2暗色帶(BB II)に対比されると考えられる。さらに立石遺跡ではA T 層準の約60~70cm 下位のNo.1~10においてカンラン石の減少とその後の急激な増加がみとめられる。これは、上の平遺跡でA T より90~100cm下位のV・N層にみられる現象と類似する。南関東地域の東京天文台構内遺跡などにおいて武藏野地域のK層およびN層付近に同様な傾向がみられる場合がある。しかしこれは地域的な堆積環境を反映している可能性もあり、武藏野地域と直ちに対比できるか不明だが、曾根丘陵内の対比の指標となるかもしれない。上野原遺跡の分析結果ではこれらの層準は認められない。おそらく上野原遺跡の分析試料はこれらの層準よりも上位であると考えられる。

第1表 立石遺跡試料の計数鉱物

試料番号	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13
A 無色	14	36	27	49	15	6	1						
A' 黒色	39	77	78	135	49	28	2	1	1	1	1		3
A'' 灰色					1								
B 無色	7	8	1	5	2	2	2	1	1			1	
C 無色		3	3	1			1	1			1		
F 無色	5	3	4	4			2			1		4	
F' 灰色	1									1		1	
F'' 黒色						1	1			1		1	
石英	68	75	84	72	75	78	70	71	62	45	57	45	45
長石	99	128	121	107	108	113	83	112	70	113	95	100	83
カンラン石	18	18	25	42	63	80	118	80	134	102	85	105	119
斜方輝石	7	16	9	13	16	32	30	26	28	21	48	46	54
斜方輝石平行連晶													1
單斜輝石	3	5	4	2	6	4	11	6	6	6	6	11	17
角閃石	2	3	10	5	4	3	8	4	4	6	6	6	6
輝石	2	1											
輝青石	1	1	1		1							+	+
ジルコイド													
スピノーン	1												
ザクロ石		+											
斜長石						+							
不透明鉱物	17	14	14	18	23	27	42	21	34	17	32	27	21
鈍鉛	12	15	16	19	3	6	4	7	6	12	10	5	2
その他	200	131	148	143	136	131	203	186	169	193	152	170	170
合計	504	535	545	606	609	506	679	626	503	516	503	510	527
粗粒物小計	51	58	63	66	113	146	210	147	186	152	185	188	218
粗粒物小計	167	203	206	179	183	191	159	183	141	158	192	145	129
大山グラス小計	65	128	113	194	68	32	8	3	2		4	2	8

4. 立石遺跡の石器出土層位とAT

No.4を中心とするバブルウォール型火山ガラスの濃集部は、ATに由来するものであることが明らかになった。このバブルウォール型火山ガラスの含有量曲線は、No.4直下で急激に増加し、No.4で極大を示した後、No.4より上方では緩やかに減少することから、ATの降灰層準はNo.4付近に、すなわち黒色帶とその上位の軟質の褐色風化火山灰層の境界あるいはII層最下部に推定される。これに対して本遺跡の出土石器は、主として黑色帶(III層)中およびその直下の褐色風化火山灰層(IV層)上部に包含されていた(第4図)。この石器出土層準は、明らかにATの降灰層準よりも下位である。従ってこれらの石器群の年代はATの降灰した2.2~2.1万年前よりも古く見積られる。下限については、立石遺跡No.11~10のカンラン石の減少から増加が東京天文台構内遺跡のK層あるいはM層に対比されるとするならば、立石遺跡出土石器は、少なくとも武藏野地域のK層あるいはM層よりも新しいと推定されるが、今後の再検討が必要であろう。なお、第4図における丘の公園14番ホール遺跡・丘の公園第2遺跡の出土石器は、AT降灰以降の堆積物中に含まれるこから、立石遺跡の石器群より明らかに新しい石器群である。

甲府盆地は、富士山東方の地域とは異なり、AT以降のテフラの堆積がほとんどない地域である。従って先土器時代の遺物の編年をすすめていくうえで、土壌化されてしまったAT火山ガラスの極大層準が今のところ唯一の鍵層であるといえる。しかしそれには富士テフラの降灰が認められることから今後より精度の高いテフラの検出が望まれる。

注1 ある形態x型の火山ガラス含有率Axは次の式で算出した。

$$Ax (\%) = (C/B) \times (E_x/D) \times 100$$

ただし B: 試料の乾燥重量 (g)

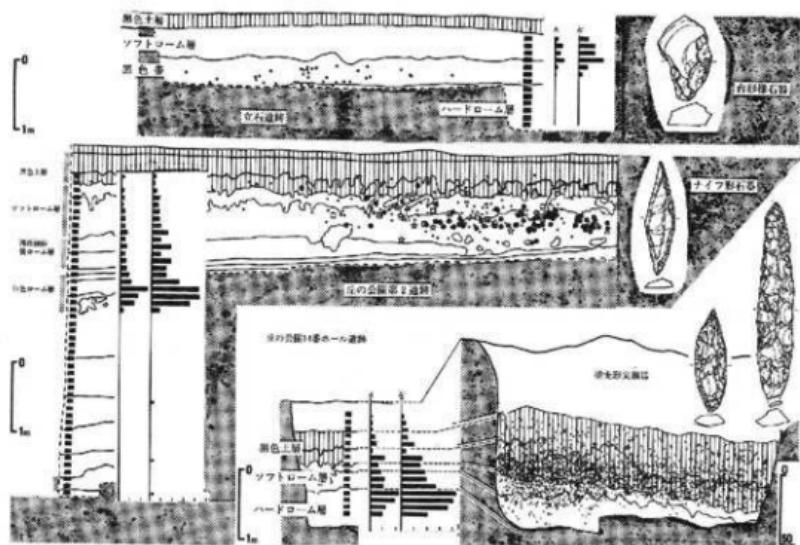
C: 1/4 - 1/16mm粒径砂分の重量 (g)

D: 計数した1/4 - 1/16mm粒計粒子の総数

E_x: 計数したx型火山ガラスの粒数

文 献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究一、第四紀研究, 11, 254-269.
- 遠藤邦彦・鈴木正章 (1980) 立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層、考古学と自然科学, 13, 19-30.
- 遠藤邦彦・関本勝久・高野司・鈴木正章 (1983) 関東平野の沖積層、アーバン・クボタ, 21, 26-43.
- 藤本丑雄 (1975) 地質、『中道町史』, 34-72.
- 羽鳥謙三・千葉達朗・加藤定男 (1983) 多聞寺前遺跡のローム層と地形、『多聞寺前遺跡Ⅱ』, 645-670.
- 平川一臣 (1982) 山梨県の地形に関する試料 (Ⅲ) 曽根丘陵のテクトニック・バルジ、山梨大



第4図 A Tのガラス含有量と石器出土層位（含有量の目盛は不同）

学教育学部研究報告, 33, 93-101.

保坂康夫・河西学（1986）甲府市内における先土器時代の可能性について。甲府市史研究, 3, 99-108.

関東ローム研究グループ（1965）『関東ローム—その起源と性状—』, 築地書館。

笠井恵祐（1952）古甲府湖の地質学的研究。『高校教育の研究』, 山梨県教育委員会。

河西学（1987a）上野原遺跡の火山灰層。『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』, 95-98, 山梨県教育委員会。

河西学（1987b）上の平遺跡のテフラ。『上の平遺跡』, 121-124, 山梨県教育委員会。

小林広和・上杉陽・里村見一（1982）桂川上流菅野川杯窓で発見された旧石器とその火山灰層序。日本第四紀学会要旨集, 12, 112-113。

小林国夫・清水英樹・北沢和男・小林武彦（1967）御嶽火山第一浮石層—御嶽火山第一浮石層の研究その1. 地質学雑誌, 73, 293-308, 337-350。

町田洋（1964）Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史—第四紀末期について—。地学雑誌, 73, 293-308, 337-350。

町田洋・森山昭雄（1968）大磯丘陵のTephrochronologyとそれにもとづく富士および箱根火活動史。地理学評論, 41, 241-257。

町田洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—。科

- 学, 46, 339-347.
- 町田瑞男・村上雅博・齊藤幸治 (1983) 南関東の火山灰層中の変質鉱物 "イディングサイト"について. 第四紀研究, 22, 69-76.
- 宮沢忠治 (1964) 曾根丘陵の第四系. 山梨地学, 6.
- 内藤範治 (1988) 曾根丘陵. 『日本の地質 4 中部地方 I』, 171-173, 共立出版.
- 沢 洋 (1981) 甲府盆地西縁・南縁の活断層. 地理学評論, 54, 473-492.
- 田中啓爾 (1925) 甲府盆地. 地理学評論.
- 東京天文台構内遺跡調査団 (1983) 『東京天文台構内遺跡』.
- 上杉陽・米沢宏・開原志津恵・中村仁子・重藤伸子・岩井都乃 (1980) 富士山東縁地域の古期富士テフラ累層. 『自然と文化』, 3, 33-46, 平塚市博物館.
- 上杉陽・米沢宏・千葉達朗・宮地直道・森慎一 (1983) テフラからみた関東平野. アーバン・クボタ, 21, 2-17.
- 吉川周作 (1976) 大坂層群の火山灰について. 地理学雑誌, 82, 497-515.

1990年3月25日 印刷

1990年3月31日 発行

研究紀要 6

発行所 山梨県立考古博物館

山梨県埋蔵文化財センター

印刷社 少国民社

